

モンゴル児童養護施設出身者の「自場」の形成過程

——施設退所後の暮らしを追って——

植 村 清 加
田 村 愛 理
村 井 美 紀

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第9号 抜刷
2024年（令和6年）3月20日

モンゴル児童養護施設出身者の「自場」の形成過程 ——施設退所後の暮らしを追って——

植 村 清 加
田 村 愛 理
村 井 美 紀

Forming “Self-Sufficient Places” in Ulaanbaatar: A Case Study of Mongolian Young People from Children’s Home

UEMURA, Sayaka

TAMURA, Airi

MURAI, Miki

Abstract

This research presents the process of establishing “Self Sufficient Places (we named “*jiba*”)” of Mongolian urban young people who used to grow up in Ulaanbaatar Children’s Home, through collaborative research of social welfare study and cultural anthropology. After the democratization in the 1990s, Mongolia experienced a rapid transition from socialism to a liberal economic system. As a result, many people lost their jobs and were left in impoverished situations. Especially many children were exposed to difficult social situations and some of them were sent to the Children’s Home.

Our research has focused on those young people. The characteristics of our research can be summarized as follows. 1) We consider these people not as people who receive support passively, but who can make their survival places actively. 2) We examine the process of forming “*jiba*” through people’s life histories, spanning a quarter of a century. 3) We present their self-build flexible living spaces in the Ger-district in Ulaanbaatar as cases of forming of *Jiba* process.

キーワード：社会変革期，児童養護施設出身者，「自場」形成，ゲル地区，協働

目 次

はじめに	
第I章 モンゴルの児童養護施設の子どもたち	
1. 「死」と「生」	
2. 子どもたちのエネルギーに触れる	
3. 支援者ツェツェグジャルガルさん（仮名）	
4. 働く子どもたち	
5. 施設退所後の子どもたちの遅しさ	
6. アンケート調査の実施	
第II章 ウランバートル市の都市化過程とゲル地区への視点	
1. ゲル地区の成り立ち	
2. ゲル地区の現状	
3. 新興住宅地としてのゲル地区：日本の戦後公営住宅（戸山ハイツ）と比較して	
第III章 児童養護施設退所後の暮らしを追う	
1. 転換期のモンゴルと児童養護施設	
2. 幼少期の記憶：児童養護施設に入る前の状況と退所時の状況	
3. 都市の隙間にスルッと入る	
4. よりよく生きる	
5. 協働的に紡ぎ出される「自場」	
おわりに：アンケートと現地調査からみる児童養護施設出身者の分析	

はじめに

本研究は、モンゴルのウランバートルにおいて幼少期を児童養護施設で過ごした若者たちのライフヒストリーを通じて、彼らの「自場」の形成過程を探るものである。「自場」とは、「自分の生きる場」を表す本研究チームの造語である。本論文では、児童養護施設出身の若者らを、彼ら自身で「自分の生きる場」を選択し、形成していく能動的な「生活者」と捉える。

1990年代に激甚な社会変革を経験したモンゴルでは長らく、転換期に路上に投げ出された子どもたちを取り巻く社会問題が注目されてきたが、施設退所後の子どもたちのフォローアップデータがなく、彼らの追跡調査を行った先行研究は極めて限られてきた。¹⁾ そのような研究状況は、結果として彼らを支援対象としてのみ捉えることにつながっている。本研究は、若者たちの幼少期からのライフヒストリーと現在の生活実践に注目し、彼らの生活者としての可能性や、彼ら自身で、または周りの人びとと協働で「自律して生きる場所」を創り出す力の要因と過程を探る試みである。

本論文は以上の問題意識から出発した社会福祉学、歴史人類学、都市人類学の共同研究の結果であり、その特性を活かして、以下の構成で各章ごとに分担執筆した。第I章は村井が担当し、モンゴル社会変動期の養護施設出身者の退所後の生活を調査する本研究の背景となる過去20年の経緯と研究動機を語る。第II章は田村が担当し、養護施設出身者の多くが現在居住している、一般的には後発貧困地帯とみなされているゲル地区の実情を考察した。さらにゲル地区に対する客観的な視点を得るために、敗戦直後の日本の公営住宅地域と比較し、ゲル地区に対する外部調査者としての私たちの視点の定め方を提示した。第III章は植村が、養護施設出身者へのライフヒストリーと彼らの生活空間であるゲル地区での調査をもとに、その具体的な生活様態や生活戦略、生

活において柔軟に形成される社会関係と空間実践について考察した。最後に、アンケートおよび現地調査に関する筆者らの考察結果をまとめた。

第1章 モンゴルの児童養護施設の子どもたち

本研究は、筆者・村井のモンゴルの児童養護施設との20年にわたる付き合いに端を発している。本章では、この間の施設訪問の際に経験したことやモンゴルの人々との付き合いを紹介することにより、本研究に至った経緯と研究動機を語る。

1. 「死」と「生」

筆者とモンゴルのかかわりは約20年前からになる。当時、筆者は乳がんになり、手術後の療養をしている最中であった。幸い乳がんのほうは早期発見により、手術後3年間の放射線治療と抗がん剤による治療を続けることになった。病後の治療は順調に進んでいたが、精神的には病気とその後につながる「死」と向き合うことになることに「恐れ」を抱きながら療養生活を送っていた。

その時、突然モンゴルに行きたくなった。モンゴルは、幼少時から身近に感じられる国であった。筆者は岩手県盛岡市で生まれ育った。盛岡市には、第二次世界大戦前に日本にわたってきた朝鮮半島の人々がいた。その方たちとともに、医学を学ぶために来日したモンゴルの方がおり、筆者の父はその方たちと交流があった。モンゴルから留学に来ていた方は、戦後国交が断絶して帰国できなくなり、医者としての資格も認められずに、洋裁の技術で暮らしていた。筆者はその方の仕事場にお邪魔し、その方の洋裁の手さばきを飽きずに眺め、そしてモンゴルの風土や文化について話を聞かせてもらっていた。日本でもなじみになっている『スーホの白い馬』という絵本もその方から教えてもらった。

それから30数年後、乳がん向き合い、「死」への畏れを抱きながら、モンゴルの空や草原、そしてそこで暮らす遊牧民とたくさん家畜などから「生」のエネルギーを感じとれるのではないかと思い、モンゴルへ行ってみたいという気持ちが高まっていったのである。

2. 子どもたちのエネルギーに触れる

求めよ、さらば与えられん！モンゴルに行きたいという気持ちを周囲に訴えていた時、友人からモンゴルツアーの話が寄せられた。Y教授の主催するグループで7泊8日の旅であった。そのツアーが、どのようなツアーであるのか知らずに、ただモンゴルの草原と青空、モンゴルの風に包まれることを期待して参加したのであった。2002年の夏のことであった。

モンゴルツアーに参加して初めて知ったのだが、プログラムの中に、モンゴルの養護施設見学と、社会福祉を学ぶ学生たちとの交流があった。モンゴルの学校の夏休みは6月から8月までの3か月間で、施設の子どもたちはその間、避暑地の草原で過ごす。ウランバートルから車で3時間余りで着いた草原に、200名余りの子どもたちが迎えてくれた。みな顔立ちが日本人と同じようで、初対面なのに懐かしさを感じた。

彼らが寝泊まりしているバンガローは、3、4台のベットが置かれ、窓にはカーテンもなく、裸電球が一個ついているようなものだった。そのようなバンガローが点在する草原で、筆者は洗礼を受ける。トイレだ。トイレというにはあまりにも原始的で、穴に板を渡しただけのところ、囲いも十分でない「便所」。躊躇している筆者に、子どもたちは身振り手振りで使い方を教えてくれた。怖気づきながらなんとか用を足した筆者に、子どもたちは笑顔を向けてくれた。

20年余り前の施設は、貧しかった。幼児たちは、お仕着せの同じミッキーマウスのTシャツを着ていた。夏の間は裸足でいる子どもたちもいた。施設長は、毎日1頭の羊を食事に用意するのに苦労していた。それは第二次世界大戦後の日本の施設の状況と似ていた。

しかし、子どもたちは元気だった。筆者たち訪問者は、小さな講堂に招き入れられた。そこで子どもたちは、モンゴルの歌や踊りで歓迎してくれた。安室奈美恵風のダンスも踊ってくれた。自分たちでテレビを見て覚えたという。そのエネルギーに圧倒された。そこにいるのは、7、8歳から18歳までの子どもだが、当時はそのほとんどがマンホールチルドレン²⁾だった。育ち盛りの彼らの体格は、日本人のそれと比べて4、5年のギャップを感じた。モンゴル人の一般的な体格は、男性だと180センチくらい、女性もすらっとした身長がある中で、低身長、低体格であるのはハンディになる。しかし、小さな体を力いっぱい使って踊る、そんな彼らのダンスは、言葉は通じないが時に優雅に、時に激しく、見ている者の内面を揺さぶるようだった。そこには、彼らが放つ「生」へのエネルギーが満ちていた。

3. 支援者ツェツェグジャルガルさん（仮名）

我々のモンゴルにおけるフィールドワークで通訳をしてくれたのはモンゴル人のツェツェグジャルガルさん（以下、ツェツェグさん）という現在60代半ばの女性である。彼女は、大学卒業後結婚して二人の子どもを育てながら小学校の教員をしていたが、モンゴル国費留学生に応募し、日本の大学で2年間日本語を学んだ。帰国後は、日本の社会福祉学者であるI教授の専属通訳者として働き、その後を継いでモンゴル国立教育大学の非常勤講師となったY教授の通訳も務めた。

Y教授は、非常勤講師の傍ら、当時たくさんいたマンホールチルドレンの支援に取り組んでいたが、それまでツェツェグさんはマンホールチルドレンの存在を知らなかったという。ツェツェグさんの家庭は、外交官である父親の元、10人の子どもがいる大家族で育ち、キョウダイはみな高等教育を受け、それぞれ活躍している。そんな中で、マンホールチルドレンの存在を知らなかったことを恥じ、Y教授の手伝いをする事で少しでもこのような子どもたちを助けてあげたいという思いだという。

5.で述べるが、施設の子どもたちと来日したときもツェツェグさんは通訳をしながら子どもたちの面倒をみていた。子どもたち（今はもう青年になっているが）とは、Y教授や日本人の支援者が来た時に通訳をするほか、青年たちの相談、例えば結婚相手にDVを受けたり、子どもが病気になったがタクシー代がないので貸してほしいなど、いまま各種の相談に乗ったりしている。

4. 働く子どもたち

第1回目の訪問から3年過ぎた2005年、筆者は再びモンゴルを訪問した。モンゴルは高度経済成長期を迎え、ウランバートル第一のデパートのショーウィンドウにはテレビと冷蔵庫、ソファークラウドが飾られていた。

再び草原の家を訪問した我々は、ハヤシライスの食材を買ってきて、子どもたちにふるまった。我々のメンバー3、4人でジャガイモの皮をむく手伝いをしながら調理の様子をうかがうと、3人の職員の指示のもと、6、7人の年長の女の子が200人分の調理を行っていた。調理するだけではなく、子どもたちに料理をよそいながら、「残さないように食べなさい」とか「お代わりは皆によそい終わってからだよ」とか注意していた。その手際はてきぱきとしており、職員と同じくらい「役にたつて」いた。

それから4、5年後、また草原の家に行った時、昼食を食べている筆者らに、年長の男の子が寄っ

てきて、昼食の食材に使われているジャガイモと人参、キャベツは、自分たちが草原の家の畑で作ったものであること、これらの野菜は1年間の食材として活用されていることを、誇らしそうに語った。彼らは、草原の家だけではなく、施設でも簡単な大工仕事やペンキ塗りなどの仕事を担っていた。日本の養護施設では、調理は職員が行っており、子どもたちは「しつけ」の一環として「お手伝い」はするが、それは生活の中で必要とされているものではない。モンゴルの養護施設では、年長の子どもたちは「必要」とされて、それらの仕事を行っていた。このような経験は、彼らが施設を出て自立していくときに、大きな力となっていることだろう。

5. 施設退所後の子どもたちの逞しさ

筆者が参加したモンゴルツアーは、Y教授が代表を務めるボランティアグループのツアーであった。Y教授はI教授の後を受け、国立教育大学で非常勤講師を務める傍ら、ウランバートル市内の養護施設を訪問し、入所している子どもたちと交流していた。2000年には、他の日本人支援者たちとともに施設の子ども13名と職員2名、通訳者1名（前述のツェツェグさん）を日本に招待し、子どもたちに日本の生活を体験させている。子どもたちは、九十九里浜で初めての海を体験し、温泉では裸で大勢の人たちと一緒に入浴したり、ホームステイ先のボランティア宅で、日本の生活体験をしたりした。それらの体験をしたメンバーは、モンゴルに帰国した後も、折にふれ日本での体験を語り合い、施設退所後も励ましあっていたという。

Y教授らは、施設訪問の傍ら彼らへの支援を行い、ボランティアの方々も、彼らが施設を退所した後も民間の里親として各自の対象とする子どもの面倒をみていた。毎年モンゴルを訪問した際には、みなが集まり、交流を深めていた。筆者もY教授に倣い、モンゴル訪問の際に集まれる子どもたちに声をかけて、近況報告などを聞いてきた。

その中にY教授が里親となっていたドルマさん（仮名）がいる。彼女は、施設退所後Y教授の支援を受け、国立教育大学に進学した。進学するにあたって大学の学費とゲルを支援してもらい、あとは働きながら4年間大学に通ってソーシャルワークを学んだ。しかし、ドルマさんが卒業した当時はソーシャルワークの仕事は無く、エアロビクスのインストラクターとして働いていた。本人はモンゴルの大学だけではソーシャルワークの学びは不十分だと思っており、できれば日本でソーシャルワークを学びたいと希望していた。相談を受けたY教授らは、日本語学校と大学院の学費、住む場所をどうするか検討し、筆者の伝手で日本の養護施設に住み込み、日本語は独学で学ぶこととして日本に留学できるように準備をした。日本語が全くと言っていいほどわからず、知り合いはY教授だけという環境の中で、ドルマさんは来日してきた。

ドルマさんが日本で暮らすにあたっては、様々な文化的葛藤があった。2、3例示してみると、日本での生活に慣れるために、バスや電車に乗れるようになることが必要と考えた我々は住居としている施設から日本語を学ぶために通う大学までの交通費を支給した。そうしたところ、本人はJR一駅の距離なら歩いて行けるとして、電車代を使わずに歩いて通学してきた。お正月に支援者の方からいただいたお年玉、合わせて2万円は、モンゴルにいるキョウダイたちが困っているからと言って、全額送ってしまった。自分の生活だけでもぎりぎりなのに、キョウダイが困っているからと言って、ことあるごとにお金を送ってしまうドルマさんだった。

また、日本語を学ぶサークルで知り合ったモンゴル人留学生が、住むところがなくなったということで、ドルマさんの部屋で寝泊まりするようになり、そこは緊急保護室なので貸すわけにはいかないという施設側と、困っているときには助け合うのがモンゴルのやり方だというドルマさんとの間で葛藤が生じた。ただ、おおむね日本での生活は、施設の小さな子どもの面倒や、掃除、

洗濯、食事作りなどは、モンゴルでの生活経験が活かされ、順調に進んでいった。

ドルマさんは、大学院修了後介護のアルバイトをしながらお金をため、一時帰国してアルバイトをしていたが、今後のモンゴルでの福祉は介護の仕事が重要になると見極め、まずは自分が介護とソーシャルワークの仕事を身につけ、そのうえでモンゴルで介護の事業を立ち上げたいと考え、今は日本で介護の仕事に励んでいる。

このように、ドルマさんをはじめとした施設出身の13人の青年たちは、施設のアフターケアが不十分ななか、互いに励ましあいながら自分の生きる場＝「自場」を形成して生活している。しかし、変革期のモンゴル社会の物質的にも精神的にも不十分な支援の中で、彼らはいかにして「自場」を見いだしているのだろうか？この問いに答えるべく、村井は2015年に植村・田村とともに研究チームを立ち上げ、彼らの生活調査を行うことにした。

6. アンケート調査の実施

本研究の関連では、2017年（2回）、2019年、2023年に現地調査を行った。2021年にもドルマさんの友人たちやツェツェグさんと交流のある青年たちに、現在の生活と施設経験について聞き取りを行う計画であったが、コロナ禍でモンゴルへの渡航ができなくなった。そこで、インタビュー調査を質問紙による調査に替えることとした。2022年10月にツェツェグさんを通じて調査票を渡し、19名の青年に回答してもらった。ここにアンケート調査の結果を示す。

【アンケート項目一覧】

1. 年齢、2. 性別、3. 施設利用歴、4. 最終学歴、5. 住居、6. 退所時同居家族
7. 現在の同居家族、8. 婚姻歴、9. 家族関係（親、キョウダイ、親族との交流の有無と程度）
10. 本人の仕事（雇用形態、給料の支払い形態、年収）働いていない理由
11. 配偶者の仕事（雇用形態、給料の支払い形態、年収）働いていない理由
12. 配偶者が働くことへの理解度、13. 配偶者の家事、育児への協力度
14. 保育・幼稚園（公立・私立）施設利用の有無、15. 教育機関の利用の有無
16. ホロー（区の行政単位）のサービス利用の有無、社会組織とのつながりの有無
17. 困ったときに相談できる人、18. 子どもを通した付き合いの有無、
19. 仕事を通した付き合いの有無、20. 近所付き合いの有無
21. 施設経験の評価（施設に入所してよかったこと）
22. 施設経験の評価（施設生活で身についたこと）
23. 施設経験の評価（施設生活で不足していた教育）
24. 退所時、意思や希望を尊重されたか
25. 施設で育った仲間はどのような存在か
26. 施設育ちであることを配偶者に話しているか
27. 施設育ちであることを友人に話しているか
28. 施設育ちであることを仕事関係の人に話しているか
29. 親が頼ってくることがあるか、それはどのような時か
30. 施設に預けられたことを今はどう思っているか

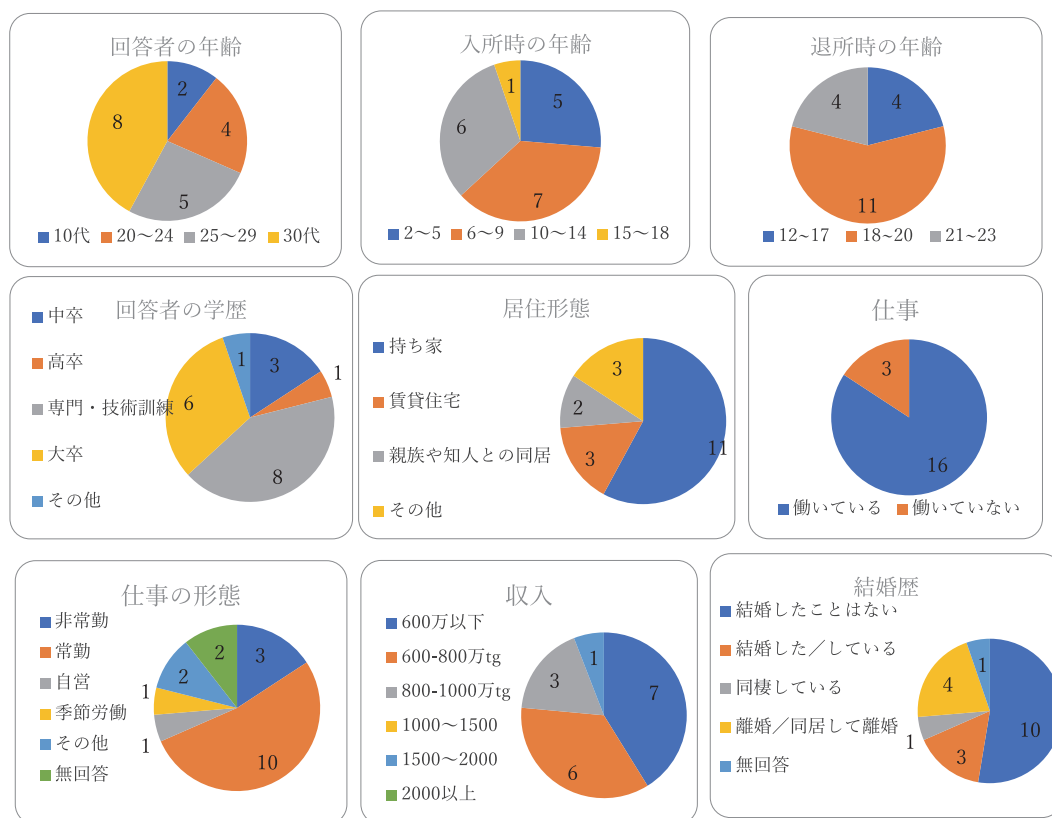
この結果を本論文で全て示すことは、紙幅の関係で無理があるので、一部を下記に示す。

アンケート協力者の性別は男性12人、女性7人である。年齢は、30代8人、20代後半5人、20代

前半と10代が合わせて6人であった。施設入所時年齢は6～9歳が7人、10～14歳が6人、2～5歳が5人、15～18歳1人である。退所時年齢は、18～20歳が11人、21～23歳が4人、12～17歳が4人である。

仕事をしているのは16人で、就労形態は常勤10人、非常勤3人、自営業と季節労働が各1人、その他2人、無回答2人だった。収入は、600万Tg（トゥグルグ）以下が7人、600万～800万Tgが6人、800万～1000万Tgが3人、1500万～2000万Tgが1人、無収入2人である。居住形態は、持ち家11人、賃貸住宅3人、親族や知人の家に同居2人、その他3人であった。学歴は、専門・技術訓練校卒8人、大卒6人、中卒3人、高卒1人、その他1人であった。結婚歴は未婚10人、結婚・同棲4人、離婚4人、無回答1人であった。主な質問項目の結果は、以下に円グラフで示した。

これらの結果から、彼らには高学歴者が多く、持ち家率も高く、仕事も安定している者が多いことがわかった。アンケート実施後、渡航が可能になったため、インタビュー調査も継続できた。その結果の一部は第三章および最後に示す。



[アンケート結果より植村が作図]

- * 「持ち家」項目では、持ち家・賃貸と複数回答しているケースもある。
- * 「収入項目」では、独身であるがパートナー収入を記入している人もいる。ちなみにモンゴルの平均収入だが、2021年の世帯平均年収は、1,897\$なので、換算すると約600万～650万Tgである。CEICdata.comより（2023.10.10 確認）

第II章 ウランバートル市の都市化過程とゲル地区への視点

本章では、本論文におけるアンケート、インタビュー対象である20～30代の養護施設出身者たちの多くが暮らしているゲル地区について、その成り立ちと現在の居住状況について述べる。さらに日本の敗戦直後の公営住宅地区と比較することにより、私たち外部の調査者がゲル地区に対する視点をいかに定めたかを提示する。

1. ゲル地区の成り立ち

ゲル地区は、研究者においてもスラムやスクウォッターと同類の貧困で不良かつ不法な居住地区と見なされることが多い。例えば、ヒップホップに表現されたモンゴルの貧富格差問題を取り上げた島村は、ゲル地区をスラム街とし、自然災害で家畜を失い食い詰めた遊牧民たちや仕事のない地方都市や村の出身者が流入してくる地域で、治安が悪く近所付き合いがなく、狭い路地にアル中のおじさんがたむろし、上下水道が整備されていないために汚水が未舗装道路に流れ出しているようなゲットーと述べている。³⁾

実は私たちもゲル地区を訪れる前は、同様な思い込みがあったのだが、2017年、2019年、2023年のインタビューで養護施設出身者たちのゲルを訪れた時には、少なくとも本章の筆者・田村の感想では、筆者自身が幼少年期に住んでいた戦後東京の活気あった新興都営住宅地の趣が見受けられ、昔懐かしい思いがした。このような印象を持った原因とその妥当性については本章3節で述べることにして、本節ではゲル地区への私たちの視点を定めるために、まずウランバートル市とゲル地区形成の歴史と現状について確認しておきたい。

ゲル地区の語源のゲルとは、モンゴル遊牧民の移動式天幕の呼称で、モンゴル語で家を意味する。ゲルは大人数人で2時間ほどあれば組み立てることができ、中軸になる2本の木柱を中心に傘状に屋根幕を支える支柱が広がり、壁は菱形蛇腹状に伸縮する木組みで囲われ、屋根と周囲を数枚のフェルト布で覆う。中心には煮炊きと暖をとるための小型ストーブが置かれ、天辺は出入り口同様に開閉可能な構造となっている。冬場は各ゲルが石炭などを燃やすので、排煙による大気汚染が激しく深刻な環境問題の一因にもなっている。出入り口は南向きに置かれ、入って正面が床の間の空間であり、伝統的には仏像・仏画等が置かれる。左手西側が男性（および客）の居住空間でソファ兼用ベッドが置かれ、右手東側が台所を兼ねた女性の居住空間であるが、本調査で2023年3月に私たちが訪ねたゲルでは、正面には仏像に代わり大型液晶TVが、台所空間には大型冷蔵庫が鎮座していた。

ゲル地区とは、ハシャーと呼ばれる板塀で囲まれた敷地内に、これらのゲルとこれも居住者らが自分たちで建てたバイシンと呼ばれる木製あるいはレンガブロック製の固定家屋が併存し、一見無秩序無制限に広がっている地区である。ゲル地区は、ウランバートル市中の平野部に建つ鉄筋コンクリート造りの近代的アパート群と印象的な対比をなし、市の北側山斜面の広大な地域に今も拡大し続けている。2023年では、総人口約345万人のおよそ半数である169万人がウランバートル市に集住している。⁴⁾ 2019年の調査では、市の人口の6割がゲル地区に暮らしていたというのがその数は年々増加している。⁵⁾ しかし、近代的ビル群とその後方に広がるゲル地区というウランバートルを特徴付けるこの風景は、一般に思われるように近代化以降のビル建設時に急に出来上がったものではない。調べてみるとその歴史は古く、モンゴル遊牧文化における定住地形成のあり方と関連していることが分かる。

近代に入るまで、モンゴル高原における定住人口集住地は、ほぼチベット仏教寺院のある場所のみであった。遊牧民は、寺院の中でも人々の崇敬の対象である活仏ジェブツンダンバ・ホトクトの寺院に年に一度参詣するのを常としたが、その寺院自体も領民を従えて家畜を飼いながらの移動ゲル集落であり、活仏の住む場所は、イフ・フレーと呼ばれた。⁶⁾ フレーは、1788年に現在のウランバートル市があるセルベ河岸で移動を止め定住寺院が設けられたが、⁷⁾ ウランバートルは、この場所に設立された門前町が起源である。この場所はロシア帝国と清朝の通商路にあたり、フレーは清朝の封禁政策下でも「旅蒙商」の長距離交易活動拠点の一つであったため、フレーが定住するとその東方に買売城と呼ばれる中国商人の木造建築（バイシン）の商業地区が建設された。⁸⁾ フレーの中心には活仏の宮殿伽藍がありそれを取り囲むように僧坊が置かれ、そこには僧侶のゲルが建てられた。19世紀中葉のフレーを描いた図を見ると、当時から既に宮殿建築を取り巻く各僧坊のハシャー内にゲル、バイシンによる居住形態があったことが分かる（図1）。⁹⁾ さらに歴史を遡れば、オゴデイ・ハーン時代のカラコルムもオールド（天幕）の宮殿を中心として、商業用街並みと中国商人用の固定家屋により成り立っていたし、フビライの建設した大都の皇宮も中国式宮殿建築の周りには、モンゴル人用のゲルが建ち並んでいた。私たちの目には特異に見える近代的ビルとゲルが併存する光景は、モンゴルにおける都市形成の初期からの原風景であることは再確認しておくべきであろう。¹⁰⁾

1911年に辛亥革命が起ると外モンゴル諸侯は清朝から独立を目指して、活仏ジェブツンダンバ・ホトクト8世をボグド・ハーン（君主）とする大モンゴル国を建てたが、1917年にロシア革命が起ると北京政府はモンゴルに侵入し、1920年ボグド・ハーン政権は崩壊した。¹¹⁾ 同年結成されたモンゴル人民党は、ソヴィエト連邦社会主義共和国に援助を求め、1921年その影響下にモンゴル人民政府が樹立されると、三度ボグド・ハーンが名目上の君主となった。しかし、1924年のボグド・ハーン寂滅後にモンゴルは立憲君主国から人民共和国に体制が移行され、ソヴィエト連邦に次ぐ世界で二番目の社会主義国となった。また、この時に首都の名前もフレーからウランバートル（赤い英雄）へと改称された。社会主義体制下では、急速に脱宗教化が図られ、チベット仏教は徹底的に弾圧された。莫大な寺院財産を削減するために寺院への課税、僧侶所有の家畜等への増税が行われ、寺院の破壊、僧侶の大量粛清などが行われた。その結果、1939年にはウランバートルの多くの寺院が無人となり、破壊されなかった堂宇も学校、工場等の公的機関に転用された。宗教の排除後、モンゴルの本格的な近代化は第二次世界大戦後にソヴィエト指導で始まった。ウランバートルと改名されたフレーの近代都市化も、1950年代にソヴィエトの援助を受け始まっ



図1 19世紀中葉のフレー

た。ちなみに1935年のモンゴル全体の総人口は74万人で、市の人口は1万人にすぎなかった。¹²⁾ 都市建設や鉱工業発展のために労働力の需要が大きくなり、首都への移動が奨励され、ウランバートルの人口が急増した。結婚・出産も大いに奨励され、社会主義時代に人口は大きく伸びた。地方においては、ソヴィエト連邦のコルホーズを模した牧畜業の農牧業組合（ネグデル）化が進められ、組合不加入者には高い税金がかけられるなどしたために、1955年には地方人口の4分の3を占めていた遊牧家族は、1950年代末には3分の1に減少したという。¹³⁾ 急激な人口増加に対応するために、ウランバートルの都市化が計画され、役所や工場の他に住宅としてアパート建設が進められ、既に平野部に存在していたゲルは郊外へ移転された。¹⁴⁾ 1960年代、70年代の都市計画では、さらにアパート開発が促進され、アパート地区への開発が未完な地域が「ゲル地区」と認識されるようになったという。¹⁵⁾

初期のアパート居住者は、政府関係者や人民党員が優先されており、労働者の勤労実績や勤労年数、家族構成などに応じて職場ごとに順次割り当てられていったが、急増する都市人口にアパート建設が追いつかなかつたために、ゲル地区は過渡的な居住地として位置付けられ、やがてはアパート地区に変わる予定であった。1990年、モンゴルは社会主義体制から民主化・資本主義化体制へ移行したが、当時の市の人口の56万人のうちアパート居住者は約半数であった。¹⁶⁾ 体制移行後に、国家資産の分配、民営化、ネグデルの解散等の施策が行われ、1997年に社会主義時代には制限されていた居住地移動が自由化されると、社会変動により生活に困窮した多くの人々が職を求めてウランバートルに押し寄せた。また、1999年から2002年まで続いたゾド（雪害）もそれに拍車をかけたとされる。さらに、2002年の土地法改正により、それまで国家所有であった土地の個人による私有権が認められると、既にゲル地区に居住していた人々のハシャー占有権が認められるに止まらず、好きな場所にハシャーを形成して占有・拡大して登記する事態となった。この結果、登記に関して色々な事件が起きており、同じ土地への二重登記や知り合いに貸していたつもりだったのに登記されてしまい追い出された等の問題が後を絶たない。¹⁷⁾

現在のゲル地区は、中心との距離に応じて、セントラル、メディティエ、フリンジに分けられ、前二者ではアパート化が目指されているが、最も広いフリンジに関しては、全体的インフラ設備の導入が困難なために、戸建てが目指されているという。しかしながら、気候や地形の問題から実際には急速な人口増加に見合う数のアパート施工は困難であり、現実においてゲル地区はますます拡大しつつある。様々な問題を内包しながらも、ウランバートル市への人口集中、特に20代から30歳代の人口増加は現在進行中で、彼らの半数以上がゲル地区に居住する結果となっている。

2. ゲル地区の現状

ウランバートル市内9つの各区は、人口1万人程度のホローと呼ばれる行政単位に分かれ、ホロー役所が置かれ、交番と診療所が併設されている。ゲル地区においては、各ホローがさらにセヘグと呼ばれる千人単位の管轄に分かれる。各セヘグには、居住者の代表としてセヘグ長が置かれ、住民の面倒を見ることになっている。セヘグ内のハシャーは、いくつかのまとまり毎に街区名があり、番地が振られている。原則的にホロー毎に学校があるが、人口急増に学校建設が追いついていない。

インタヴュー先でも、学校が急坂を下った数キロ先にしかないので、毎日車で祖父母に送迎してもらっている家庭もあった。公共交通機関はバスのみでゲル地区の幹線道路を走っており、地区内ではミクロと呼ばれるミニバスが走っているところもあるが、地区内の入り組んだ道路は未整備で凸凹である。白タク利用も多いようだが、必然的に自家用車・バイクの必要性が高くなり、



写真1 ゲル地区風景 2019年6月 [撮影:田村]



写真2 給水中の子ども 2023年3月 [撮影:田村]

ウランバートル名物の慢性交通渋滞を引き起こす原因となっている。

インフラとしては、ゲル地区では電気は配線されているが、先に述べたように上下水道設備はない。生活に必要な水は給水場から買ってくる。¹⁸⁾ 給水場はホロー内に複数置かれ、多くの場合は数百メートルの距離にある。水運びは小学生くらいの子どもの仕事のように、手押し車に20ℓポリ容器を数個載せて運んでいる子どもをよく見かける。給水場は係員がいて、横で共同シャワー・洗濯場を開設している場所もあった。最近では、IC化が進みカード購入も可能である。下水の方だが、トイレはハシャー内に小屋を建て、渡した板の間の溝に落とす構造で、一昔前の日本の田舎の便所と同じである。ただしモンゴルには農耕民のように肥溜めにするという発想はなく、穴が一杯になったら埋めて横に新しい穴を掘っていたという。私たちが訪れた家庭では、便所溝をコンクリートで囲んであり一杯になるとバキュームカーが来ると言っていたが、冬の間は凍ってしまうので汲み取りは夏の期間のみだろう。バイシンを建てた家庭では、屋内にトイレとシャワー室、洗濯機置き場を作っている家もあった。台所などの生活排水は量が多くなれば敷地に撒かれる、ゴミは回収車が月に1、2回程度来ると言うが、空き地に捨ててしまうというけしからぬ人も少なくないようで、空き地がプラスチックゴミの山になっている所もあり、環境問題の一つとなっている。電気は、通りに並ぶ電柱から各ハシャーに配電され（盗電もあるようだが）、メーター式で使った電気代が徴収される。先に述べたように、私たちが訪れたゲルでは中央奥に大型液晶TV、台所場所に大型冷蔵庫、玄関脇に洗濯機が置かれ、これらの家電はかつての高度成長期日本における「三種の神器」のように、子育て中の若い世代の生活向上のシンボルとみなされているようであった。ちなみに2020～2022年のコロナ禍下では、政府による電気代補助が出たという。また、携帯電話のみならず、パソコン、iPad等の普及は著しい。特にコロナ禍では学校の授業がライブ配信で行われたので、各家庭でこれらのIC機器は必須であった。パソコン等がない家庭では、親の携帯電話で遠隔通信授業を受けたと言っていた。モンゴルにおいて通信機器は広く普及しており、探し回ってやっと辿り着いた遊牧民の冬営地ゲルにおいても太陽光発電やパラボラアンテナが備えられていた。この時のインタビュー対象者は年配の女性遊牧民であったのだが、若者だけでなく彼女も携帯はもちろんパソコンも使いこなしていたのは印象的であった。また買い物は、ゲル地区内に雑貨やインスタント食品等を扱う小商店があるが、住民は生鮮食料



写真3 丘の上まで建ち並ぶゲル
2023年3月 [撮影:田村]



写真4 地区には豪華バイシンも
2023年3月 [撮影:田村]

品等は主に市内のザハ（市場）に買いに行く。

インフラ面だけでなく、アンケートではゲル地区における社会交流について質問し、さらにインタビューでも聞いてみたが、既存研究でも度々指摘されている通り希薄である。ゲルの建設や建て替え、バイシンの建設時に頼るのは、親戚や今まで付き合いのある人々で、普段は近所付き合いはあまりしない。しかし、第三章で語られるように、火事など緊急時の助け合いやトイレが壊れた時や子どもの遊び場などの提供などは行われ、ある程度の隣人関係は成り立っている。

3. 新興住宅地としてのゲル地区：日本の戦後公営住宅（戸山ハイツ）と比較して

本節では、既述のような特徴を持つゲル地区への筆者らの視点の定め方について述べる。一般にそしてモンゴル政府の公共政策の中においても、首都ウランバートル郊外に広がる広大なゲル地区は、克服されるべき貧困と前近代的後発地域の象徴とみなされている。ここに住む住民は、ソ連時代以降に建てられたアパート居住区に住む中流以上の都市住民に対比させて、貧困と失業が蔓延するゲル地区の下層民とみなされることが多い。そのような視線は、ここに住む若い人々の意識にも影響を与えており、例えばラップに現れた彼らのアパート地区に対するコンプレックスは現代モンゴルのゲル地区若者の実態として紹介されてもいる。¹⁹⁾

確かに筆者自身も養護施設出身者のインタビューで彼らの居住地であるゲル地区を2017年に最初に訪れた時には、屋外トイレや空き地のゴミの山を見て一種のスラムではないかと思ってしまった。しかし、給水場に来ていた少年たちの明るく屈託のない様子を見かけてその印象は間違いではないかと疑ってはいた。2019年に本研究の一環としてモンゴルにおける女性の自律を調査した際に、急斜面のゲル地域に住むフェルト工房を営んでいる女性事業主を訪ねた。彼女の家は、狭いが小綺麗に整理されたバイシンであった。インタビューの後に、彼女の敷地であるハシャアの外に出た時であった。夕暮れの急坂下に広がる景色を見た時、突然私を襲ったのは紛れもない郷愁を伴う既視感であった。夕暮れ時の丘陵には、ハシャア（板塀）に囲まれた多くのバイシンとゲルが点在し、急坂の下に中学校の敷地が広がり、その道を挟んだ右手に共同シャワー・洗濯場があった。この風景を見た時に、50年以上も前に自分が育った都営住宅の我が家があった坂上

から見たもうすっかり忘れて果てていた風景、夕陽に照らされ昏れなずむ坂下の商店街とその奥の公衆浴場の煙突から上がる煙、その風景が突然脳裏に蘇ったのである。第二次大戦後間もない時期の東京に生を受けた私は、戦後初の都営住宅に育ったのだが、高度成長期の1960年代末に郊外の一戸建て住宅地に引っ越しした後はその風景は思い出すこともなかった。しかし、その時突然、忘れ果てていた幼少時代の夕方の都営住宅の光景が蘇ったのである。この時の私の感情がセンチメンタルな独りよがりの思い込みではないかという自分自身への疑いを晴らすために、時と空間を離れた両者の居住区の類似点をこの機会に少し調べてみようとする客観的な証左を探してみると、当該都営住宅の成り立ちに関する論文が出ていた。この論文を読んで、自分自身の経験として記憶に残っている事柄が、他者の研究調査の対象になるという貴重な機会も得ることができた。戦後の都営住宅とゲル地区の比較は、この地区への筆者らの視点の定め方を決める根拠に関連するので、以下紹介したい。

ひとの生において各人の生きた時代の体験・経験は、モノの見方に大きな影響を与える。1950年代に筆者が育ったのは、今日では老人問題の最先端の限界集落として知られる、「戸山ハイツ」と言われる第二次世界大戦後に日本で初めて建設された都営住宅地であった。この都営住宅は、戦後の住宅不足を解消する政策の一環として、陸軍戸山学校の跡地にGHQの提唱によりアメリカ軍のバラック材を建築材料として1949年に1,052戸建設されたものである。²⁰⁾ 当時は太平洋戦争末期の空襲により家を失った家族が多く、当該都営住宅の建設当初の入居抽選の倍率は35倍であった。²¹⁾ 20代の若い新婚夫婦であった私の両親は、焼け残った家に数家族が同居するような生活を送っていたので、都営住宅への移転は誠に幸運なことであった。家はまさしく板張りのバイシンで、4畳半と6畳に台所、水洗便所という間取りであった。まだ汲み取り式便所が当然であった当時に水洗便所が備わっている住宅は非常にモダンだと思われたと聞く。入居者はさまざまであったが、家賃が当時の国家公務員初任給（1948年で2,990円）の3分の1程の高値（規模により750～1,080円）であったこともあり、²²⁾ 結果的に国家公務員や規模の大きい企業の社員が多かった。しかしながら、風呂もなく近所に買い物ができる所もなかったので、居住者らが都にこれらの施設設置を願うなどの要求をした結果、公衆浴場ができ、生活協同組合も結成された。²³⁾ 戸山ハイツに関する論文著者によれば、これら初期住民たちの特徴は、自らの居住環境を自分たちで整えようとする向上心であり、時が進むにつれて彼らは都営住宅の規制を掻い潜って各木造家屋の玄関、風呂、台所、続いて部屋の増設、垣根等の整備を自発的に行なったという。我が家もまさにこの順序で、部屋が増えていった。

しかし、その後高度成長期が訪れると木製バラックの都営住宅は次第に下層住宅地とみなされるようになり、2DKに代表される近代的高層コンクリートアパートへの建て替えが都側から提示されるようになり、これに対する住民側からの払い下げ要求なども起こり論争になった。²⁴⁾ 当時、宮城まり子主演の「バタヤ」集落を舞台にした映画が連作されていた。ある時、母に連れられて弟とその映画を見に行った。²⁵⁾ 映画の最後に、女主人公が彼女の住む集落を背景にして未来への希望を叫ぶような場面があったと記憶している。とにかく、女主人公の背景に映ったのは、紛れもなく我が家のある都営住宅風景であった。まだ幼かった弟はそれを見て、暗い映画館の中で「アッ、ウチが映っている！」と大声で叫んだので、母は慌てて「シッー」と彼の声を抑え込んだものである。今考えると、高度成長期にかかっていたこの時期に、戸山ハイツが戦後混乱期の先端モダン公営住宅から映画の下層集落モデルへの転落に要した年月はわずか10年ほどである。高度成長期の変化の激しさが窺われるエピソードではないだろうか。結局、1970年代に戸山ハイツは近代的高層アパートに建て替えられ、公営住宅における収入制限なども導入されたために、住

民の多くは東京郊外に一戸建てを建設して移住していった。その後、残った住民の高齢化が進み、半世紀後の今日の戸山ハイツは、都心にありながら高齢者の多い限界集落として新たな研究関心を呼び起こしている。

筆者が経験した戸山ハイツ変貌の歴史とゲル地区の歴史とを併せて顧みると、時空を超えた2事例に意外にも多くの共通点と、当然のことに違いが浮かび出てくる。戸山ハイツを研究した古賀・定行は、研究結果を次のように要約している。1) 居住者は、自らが内装を整える(床や畳張りなど)ことから始まり、家族人数の増加に対応した居住環境を形成するために増改築を繰り返していた。2) 大団地であったが、8つにグルーピングされた上で班分けされ、コミュニティ形成が図られた。3) 共用施設の開設は居住者の活動により整備され、また運営に参加する等、意識の高い居住者により施設が開設・整備されていた。4) 居住者の中には、より良い居住環境形成を目指す者が多数おり、彼らの意識や活動はその後の建て替え事業や現在の居住に影響していることが期待される。以上の要約から鑑みると、ハイツとゲル地区住民との共通点は、1) であり、決定的な違いは2) である。3) に関しては、共通点と相違点が混合している。4) は、建て替えで多くのハイツ住民が郊外住宅に出てしまったこともあり、著者らの期待通りには運ばなかった。これらは、1) 個人生活改善、2) コミュニティ活動、3) 共用環境改善への努力と捉えることができよう。

この点に留意してゲル地区に話を戻すと、ゲル地区の人々の住まい方を調べた松宮は、この地区は決して低所得者による不安定居住の集積ではなく、実際には経歴を異にする人々が、日々の日常生活、さらに未来を切り開こうとさまざまな実践を繰り返している、と観察している。²⁶⁾

1) 個人生活改善の実践という点では、居住者たちは、収入が不安定な状況下においては、まずハシヤーの獲得→ゲル建設→バイシン建設が目標となる。彼らの生活戦略は、夫婦の就労状況や学歴等に規定されているが、収入が安定してくるとバイシン改良さらにアパート取得が目指される。実際に私たちがインタビューした30代の家庭においても、同じ過程で生活の向上を常に目指していた。先に述べたように家電の大型化はもとより、前回のインタビュー時にはなかった玄関間がゲルに敷設されたり、子ども数が増えると共にコンクリート外構を持つバイシンがゲルの隣に建てられたり、トイレの下もコンクリートで固められ汲み取り式になっていたり、常に生活向上が目指されていることが確認できた。

次に2) コミュニティ活動であるが、戸山ハイツでは、全戸が100～200戸の8地区にグルーピングされ、各地区に管理人が置かれ、GHQ払い下げの公営住宅であり戦後民主化の雰囲気もあつてか、キリスト教会やその名もネバーフット(近隣)センターという幼稚園を兼ねた全地区対象の集会所があり、筆者の母ら若い世代(当時20～30歳代)では、料理講習会、ダンス講習会、読書会、政治集会、無尽講に至るまで同階層の間では活発な相互扶助を含めた活動があった。一方モンゴルでは、近隣関係が希薄であり以上のような活動は余り盛んではないということはモンゴル研究者らが一様に指摘することであり、私たちのアンケートとインタビューからも同じ結果が出ている。モンゴルの遊牧民は、「ホト・アイル」と呼ばれる単婚家族による地縁の共同体の数家族が集まって季節ごとに宿营地を設け、各世帯から当番を出し労働の負担を軽減する共営世帯を作ってきたが、²⁷⁾ これは固定的に形成されるのではなく、自然条件や季節変化、家畜頭数や種類、各世帯の世代や状況に応じて柔軟に集合/離散を繰り返すもので、組むか組まないかも個人の選択である。自由主義経済化以降の遊牧においては、この機能が遊牧においては再評価されているというが、ゲル地区住民においてもゲルやバイシン建設で人手が必要な時、また病気の時なども頼る相手は一義的には家族・親族・友人、さらにアンケートによれば、NPOや教会などコミュニティ外部の団体という個人が選択する人間関係であり、火事などの緊急時を別にして近隣関係が当て

にされることはあまりない。

このような希薄な近隣関係であるので、3) 共用環境改善に関しては、住民が協力して行政に働きかけるといふ力には乏しく、上下水道、暖房設備といったインフラ設備においては、「行政機関にやってもらうことが当然」という考えが強いという。²⁸⁾しかし、現実には政府の財政困難によりインフラ整備もアパート化による環境改善という青写真も遅々として進まない。それでも、2019年に私たちが訪れたゲル地区では、1990年代に地域で水道設備を整備し、そこを管理することになった人が水道局員として水場を管理するとともに、共同シャワー・洗濯場を管理し、洗濯代行などを行っている例もあった。また、子どもたち相手に安価なパン店を開いて地区の人々に役立ちたいという女性もおり、住民個人による近隣の共有環境改善への努力は少なからず見受けられた。

以上の比較から浮かび上がるのは、日本の戦後混乱期から高度成長期とモンゴルの社会主義体制から自由経済体制移行時の混乱期とその後の高度成長期という、時空を隔てはいるが似通った時代環境の中で、庶民が持っていた／いるより良い生活へ向かおうとする逞しさである。2DKアパートが当然となった高度成長期ましてや温水シャワー式トイレが当然となったポスト高度成長期の日本社会しか知らない世代には想像外かもしれないが、戦後の混乱期を親から聞きかつ一部経験しつつ（脱脂粉乳の給食など）育った身から見ると、戸山ハイツはもとよりゲル地区も決してスラムではない。混乱期を乗り越え、少しずつ生活を向上させながら人々が未来に希望を繋ごうとした／している新興住宅地区であった／あると言えよう。

現在、モンゴル政府によるゲル居住者のアパート移住政策貫徹が現実的には困難である以上、ゲル地区は今後も大気汚染等の環境問題への負荷を削減させる方策の段階的实施と併行しつつ残るであろう。戦後高度成長期に長屋形式公営住宅からコンクリート団団住宅2DK・2LDKへ、ポスト高度成長期から現在までは、高齢者集団が取り残される限界集落へと変貌しつつある「使い捨てハコモノ」公共住宅政策を進めてきた日本とは逆に、ゲル地区は居住者の経済・家族状況の変化に応じた伸縮可能な居住形態として、「遊牧的要素を持った、災害へのレジリエンスや柔軟性を保持したユニークな都市形態」²⁹⁾としての可能性が再認識される日が来るかもしれない。私たちのゲル地区への視点をここに定めることにして、第三章ではゲル地区に住む養護施設出身者らの若い世帯の逞しさや将来への生活戦略などを具体的に語る。

第三章 児童養護施設退所後の暮らしを追う

本章の筆者・植村は、勤務する大学のフィールドスタディ引率者として2011年にはじめてウランバートルに行き、公立・私立の小・中・高校や児童養護施設、国際NGO等を訪問した。学生たちのホームステイ先となった私立高校の生徒宅には、お母さんが外交官でロシア語も教えてくれる家や、ゲルに住むオジさん宅に居候している家、お父さんがシャーマンで夜にいろいろな人が訪ねてくる家、放課後に養護施設に勉強を教えに行く生徒などがいた。ウランバートルという都市にある実に多様な「ホーム」の存在に関心をもったことをきっかけに、2015年以降に何度か村井・田村と市内の養護施設や施設の子どもが夏休みを過ごす郊外の「夏の家」を訪問しては、子どもたちと東の間の交流を行っていた。

2017年になり、私たちはドルマさんを通じて、施設を退所した20代後半から30代前半（当時）の青年たちを紹介してもらった。いずれもドルマさんと世代的に近く、1990年代後半から2000年代にかけての社会変動期に幼少期を過ごした人々で、その後も様々な経験をしながら、仕事もち、あるいはパートナーや家族・子どもをもってウランバートルで生活していた。それから2023

年までの間に、時には彼らの家や職場にお邪魔しながら、継続的に、または知り合いを紹介してもらう形で、これらの青年たちがどのように変化の著しいモンゴル都市を生きてきたのか／いるのかを聞き取るようになった。本章では、社会変革期の児童養護施設退所後の人々のライフヒストリーと現在の暮らしの様子を描き出し、彼らが現代都市のなかで自分の生きる場をどのように構築していくのか、そのプロセスと展望から、「自場」について考える。

1. 転換期のモンゴルと児童養護施設

モンゴルが社会主義から資本主義、国有財産の私有化・民営化へと舵を切った1990年代は、多くの生活困窮者や失業者が生じた。そして、ストリートチルドレン（あるいは「マンホールチルドレン」）をはじめ、多くの困窮した子どもの出現が社会問題化（保護される子どもの人数のピークは1997-1998）し、その保護・支援活動が様々な主体により行われたことは国際的にも知られている。³⁰⁾

当初は孤児の保護のみ行っていた国立児童養護施設（1960年設立）も、親がいても保護が必要な子どもや生活困窮家庭の子ども、路上で暮らす（あるいは長時間過ごす）子どもを保護するようになった。90年代を通じ、政府、国際機関や国際NGO、民間、宗教団体など様々な主体による子どもの保護・自立支援活動がはじまり、1998年には国立を併せて19施設に、2007年には30施設、2018年では32施設になった。³¹⁾

一方で、「児童」養護施設は、その性質上一定の年齢までの保護活動になる。社会福祉分野では早くから、施設退所後の青年たちの生活支援・自立支援の必要性が認識され、³²⁾ 施設退所後の暮らしを見越したリービングケアやアフターケア、サポート体制の必要性が指摘されてきた。³³⁾ その後、施設環境は少しずつ変化し、2023年3月にウランバートル市立児童養護施設で聞いたところでは、最近になって施設出身者自身が、退所後の苦労を活かした相談体制を整える自助的活動をはじめ動きがあるという。

こうした課題は認識しつつも、彼らを支援対象者である前に、能動的「生活者」と捉える本論が関心を持つのはやはり、青年たちへの支援の在り方の前に、彼らがいかに自身の生活の場を構築していくアクターなのかという点である。本研究が実施した施設出身者の退所後の追跡調査は、十分な制度的サポートやアフターケアがないなかで、彼らがいかに、ウランバートルという都市の具体のなかで、自場を形成していったのか／いるのかを知るものとなるだろう。

2. 幼少期の記憶：児童養護施設に入る前の状況と退所時の状況

私たちが話を聞いた人たちが施設に入った背景には、大別して1) 主たる養育者の経済的理由や居住拠点の確保が困難、2) 親（すべてのケースで母親）の新しいパートナーとの関係の悪化（アルコール問題や暴力など）や家庭内での居場所のなさ、3) 親・養育者との死別、という3要因が語られた。施設入所前の状況の詳細は、幼少期のため記憶にない場合、語りたくない場合もあり、すべての人から詳細を聞き取れたわけではなかったが、施設退所後について検討する前に、本節では本章で主に検討する4人のバックグラウンドとして、施設に入った背景と退所時の状況について述べる。社会主義から大きく変動するモンゴル社会の状況や周囲の子ども・人々の様子が伝わると同時に、年齢の違いにより退所時の状況も異なっている。なお、本章ではすべて仮名を用いる。

事例A. チメグさん（1984年生まれ。入所期間：1994-2002 / 10歳から18歳）

チメグさんは、9人キョウダイの下から3番目、上2人は里子に出ており、チメグさんを含む6人

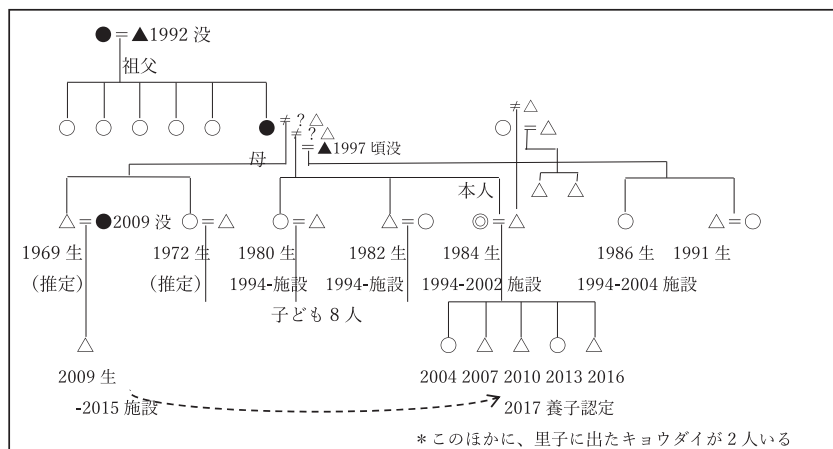


図2 チメグさん親族図 [2017年9月のインタビューより植村が作成]

は母方の祖父³⁴⁾と生活し、一番下の弟だけは母親とそのパートナーで弟の父親と一緒に暮らした(図2参照)。母は時々、祖父の家に来たが、一緒に暮らしたことはない。父親には会ったことがなく、長兄・長姉や、自分より下の妹・弟とはそれぞれ父親が違う。一番上の兄は放浪生活や刑務所に入った時期があり、幼少期にあまりみかけていない。

一家の生活は、主に祖父の年金と、清掃の仕事に就いた長姉の収入に拠っていた。チメグさんと妹は幼稚園から教育を受けたが、小学校時代、服やノートが足りず恥ずかしい思いもした。また、夏はバイシン、冬はゲルに住んだので冬には暖を取るのに必要な石炭を拾いに行ったりして、³⁵⁾ 学校に通えない時期もあった。1992年に祖父が亡くなってからは、当時20歳だった長姉が年下のキョウダイ4人の面倒を見たが、心配した地域の人々がホローに相談し、ホローから施設に入れた方がいいのではと薦められ、下の4人は施設に入るようになった。

チメグさんと妹は、幼稚園から学校に通ったので、スムーズに施設に馴染んだ。入所後1年は、身分証ができず学校に入れなかったので施設内で教育を受け、翌年3年生に入り、7年生まで過ごし、8年生は夜間学校に通った。学校以外の時間は施設内で生活訓練を学んだ。当時は、女子は裁縫、男子は大工技術などを習った。身の回りのもの全般はつくれる。お金がなくクラスメイトとは遊べなかったので、友達は施設の友達だけだ。

母親は子どもに会いに月に1度は施設に来た。1997年頃、夫(妹たちの父親)が亡くなり、母はアパートの管理人の仕事に就いた。地下室に住み掃除やビルの管理をする仕事だ。ときどき施設から母に会いに行った。妹は母に抱きついて甘えたが、チメグさんは、恥ずかしくて甘えられなかった。

しばらくすると、2つの児童養護施設が合併³⁶⁾し、のちに夫となるアルタンさんと出会った。チメグさんより2歳年上のアルタンさんは、困窮に加え、母親の新しいパートナーである父親(3人兄弟。アルタンさんのみ母の前夫の子)がお酒を飲みすぎるため施設に入った。彼は、施設では音楽や靴づくりを習い、身につけた。その後のチメグさんは「当時周囲の青年の多くが進学していたから」と自動車修理の技術専門学校に進んだが、18歳になり、施設を退所した。[2017年9月インタビュー]

事例B. ソロンゴさん（1986年生まれ。入所期間：1994-2004 / 7歳から18歳）

ソロンゴさんの母親はずっと学校の清掃の仕事をしていた。社会主義時代は、仕事があれば家は無料で借りられたはずだが、母には住む家がなく、幼少期は、伯母（母の姉）の家に住んだ。父親に会ったことはない。5歳下に弟がいるが、弟の父親は亡くなったと聞いている。伯母の家にいた頃、母が仕事で留守中、伯父（伯母の夫）がソロンゴさん姉弟に暴力をふるい、幼かった弟が床に落とされた。それを母親に話した日の夜中、母と伯父の大喧嘩になり、3人とも家を追い出された。

その後は、転々としながら暮らした。母が働いていた学校にも何度か泊まった。社会主義時代は、24時間保育や平日預かり幼稚園（月曜に登校し、金曜に家庭に帰る。週末のみ家庭で過ごす）があったので、土曜の朝から日曜まで母の職場に行き、学校の地下の部屋で暮らして、月曜に登園した時期もある。そのうち母は居場所を転々として暮らすなら子どもは施設に入れた方がよいと判断し、7歳で施設に入った。当時、弟はまだ2歳だったので別の、国の施設に入った。

母は「必ず会いに来るから、心配しないで」といったが、はじめは悲しくて1日中泣いた。しばらくすると泣かなくなり、いろいろな場所を転々とするより温かいところにいた方がいいと思うようにもなった。実際に、母は毎週会いに来てくれた。施設に入った7歳から10歳は学校に行っていないが、その後、高校まで施設から通った。

ソロンゴさんも、1999年の施設合併がきっかけで、のちの夫になる2歳年上のバートルさんと出会う。13～14歳頃から付き合っていた。施設では、歌と踊りが好きで、将来歌手になりたいと思っていたほどだという。掃除、裁縫、子どもとの交流や世話などは全般的に学んだが、社会のなかでどう生きたらいいのかなど、退所後に必要となるいくつかの教育には欠けていたし、退所の意向や進路に自分の意思は反映されなかったという。そして18歳になったため、施設を退所した。[2017年9月インタビュー]。

事例C. エルデネさん（1991年生まれ。入所期間：1999-2012 / 8歳から21歳）

1999年に母親を病気で亡くし、子どもたちの面倒を見る人がいなくなったため、兄・妹と一緒に施設に入った。彼女の場合は、両親がいなくなったため施設に入ったと理解している、としてそれ以上のことは語らなかつた。施設にいるときから、絵を描くことが得意だったので、木彫人形の上に絵を描く人形づくりの技術専門学校に進んだ。エルデネさんの時代は、保護される子どもの数が減り、18歳以降の青年への支援策も出されていたため、2012年に21歳で技術専門学校を卒業するまで施設に残れた。[2017年8月インタビュー]。

事例D. セオラさん（1993年生まれ。入所期間：1999-2014 / 6歳から21歳）

エルデネさんの妹。養育者が亡くなり、施設に入った。親戚などの縁もないようだ。施設にいた時から裁縫が得意だったので、裁縫を専攻し、技術芸術専門学校に進学した。学生時代にも夏休みの間に裁縫の会社を手伝いに行き、仕事を覚えていった [2019年6月インタビュー]。

事例Aチメグさんと夫のアルタンさん、事例Bソロンゴさんとその夫バートルさんは、私たちの調査対象者のなかでは最も年上に位置する（調査開始時30代前半）。彼らは社会主義時代に生まれ、施設に入るのは子どもの権利保護法の可決（1996年）や教育大にソーシャルワーカー養成課程が設置される（1997）前であり、施設入所期間はストリートチルドレンがもっとも増加した時期に重なる。

施設に入ったことは、「今振り返ると入れてよかった」（チメグさん）、母親と一緒にいたかった

が子どものいる環境として「いろいろな場所を転々と移動するより、温かいところで過ごせるほうがいいと思うようになった」（ソロンゴさん）と述べている。

一方、彼らより少し若い事例C.エルデネさん、事例D.セオラさん世代（調査開始時20代後半）になると、保護される子どもの数が減少し、18歳以降の移行期にしばらく施設を利用できる制度ができ、学生の間は施設に残れるようになった。そのため、この世代には18歳になると同時に住む場所を失わないよう、大学や技術専門学校への進学を選択したと答えた人もいた。このことは、結果的にはあるが、施設出身者や施設に馴染む人は比較的高学歴であることや、家庭内の仕事などにも一通りの技術があることにつながっているかもしれない。学生時代の専攻とその後の仕事に関連がない人もいたが、セオラさんのように、現在まで裁縫の技術が彼女の生活を、経済的（収入）、空間的（ときに居住）、価値的（仕事の楽しみ）に支える重要な軸になった人もいる。

3. 都市の隙間にスルッと入る

では、施設を退所してから現在まで、青年期の彼らはどのように自身の生活空間を切り開いたのだろうか。聞き取りからは、都市に様々な形で存在する物理的な隙間や、様々な関係性のなかでつくりだされた隙間から自身の生活の場を見つけていったことが分かる。³⁷⁾

事例A. チメグさん、アルタンさん

2002年に退所したA.チメグさんは、当時健在だった母ではなく、幼少時に同居していた長姉のもとに戻り、そこから学校に通った。しばらくして、先に施設を出た彼（夫アルタンさん）が「住所確定所」³⁸⁾に移動したと聞いたので、彼を探しに行き、そのままそこで一冬（2～3か月）一緒に過ごした。2003年に妊娠が分かった。妊娠中も学校に通い、技術専門学校を2年半かけて卒業した。そして、生活訓練センター³⁹⁾にいる2004年に長女を出産した。

最初の子を持ったチメグさん夫婦（20歳と22歳）は、1年間はアルタンさんの親の家に住んだ。当時、彼の親は教育大学の水道管理の仕事をしており、大学寮の一室で生活していた。彼女たちもそこに住んだ。しばらくして夫家族とトラブルになり、彼女は夫の実家を出て、夫とも別居した。その後、ゲル地区のシェアハウス（国際NGOが開設した女子寮）にいた妹宅に子どもと身を寄せた。妹は、2004年に18歳で施設を退所し、技術専門学校、その後大学へと進学していく。施設のときの友人姉弟と同居した時期もある。そういう仲間は「親戚みたいな存在」だという。その後、日本の支援者が妹にゲルを買ってくれて、妹が敷地内にゲルを建てさせてくれる人を見つけたので、そこに妹と弟と住んだ。夫との別居は2年続いたが、彼は仕事をする度にお金をもって子どもに会いに来たため、再度一緒に暮らすようになった。彼には決まった仕事がなく、夏は道路舗装、冬は別の仕事と、その時々の仕事をする時期もあったが、⁴⁰⁾施設にいた頃から交流のあったキリスト教教会で働きはじめると、一家は教会保有の敷地（ハシャー）に住むようになった。[2017年9月インタビュー]

調査時の家族構成は、チメグさんと、夫、6人の子ども（長女13歳、長男10歳、次男（養子）9歳、三男7歳、二女4歳、四男1歳半）の8人だった。夫婦の実子は5人、次男は養子で、チメグさんの長兄の息子である。自分たちで子育てをしながら暮らせている、ということだった。

ここで語られただけでも、①姉の家、②住所確定所、③生活訓練センター、④夫の実家：大学寮、⑤妹が住む市東部のゲル地区の女子寮、⑥施設の友達との同居、⑦妹のゲル、⑧市西部のゲル地区で教会所有のハシャー、と市内のさまざまな隙間を転々としながら暮らしている。そこでは、様々な関係性と空間への柔軟な対応が見られ、単に「家族だから一緒に住む」のではない。

「入る」「出る」の背景を見ると、例えば、恋人の消息を追って①から「出て」、脆弱ながらも社会につくられた子ども・青年サポートの場（②③）を拠点に、学生を続けながら子を持つ親になっていった。母子となり④に「入る」が、夫の父親が、チメグさんがもっていた古いゲルを売ってお酒を飲んだことから夫家族とトラブルとなり、彼女は夫の実家を「出た」。当時、長女に病気が見つかり、手術にお金がかかる時期だったため、他に移ることを決意したという。その後、より関係が近かった妹や「いまや親戚のように思っている」という施設時代の友人（⑤⑥）との同居を経て、ゲルに住む（⑦）。そして別居していた夫との関係を修復して⑧に移動している。そこには、青年から母となったチメグさんがその時々で優先したものも見えてくる。

同時に興味深いのは、「ゲル」である。日本の支援者が買ってくれたわけだが、それを彼女たちは、「ゲルを建てさせてもらえる人＝場所」を見つけて住んでいる。ゲル地区の住まいを研究した滝口は、遊牧的な価値観が継承される相互扶助的な土地利用の形態として、ハシャー内に他者が一時的に住まうことを許容する「割り込み居住」に注目している。拡大家族の同居や間借・賃貸とは異なり、依頼者と受入者は、三親等以上の親族ないし非血縁者、知人などの関係であるが、金銭のやり取りのない、一時的な同居だという。⁴¹⁾ そこには、ウランバートルという都市に存在した柔軟性のある、一種の助け合いが見える。これまで、退所年齢を迎えると施設から「身一つで都市に投げ出された」と言われることもあった施設退所者の自場形成を考える上で、可動性の高いゲルの活用や一時的な共住を許容する空間や土地の利用法のなかに人々の能動性や都市住民の關係的作法が見られる点は重要だ。

事例B. ソロンゴさん、バートルさん

ソロンゴさんは2年遅れて学校に入り、高校を20歳で卒業したため、施設を退所した18歳時点ではまだ高校生だった。当時、施設の周辺のゲル地区にキリスト教NGOが建てたゲル女子寮が3～4カ所あった。親身に相談にのってくれたNGOのアメリカ人支援者が寮に誘ってくれたが、弟がまだ施設にいたので、女子寮には入らなかった。すると、彼らがゲルを買い、ゲルを建てる場所も紹介してくれた。そのため退所後は母と弟と暮らせるようになった。

母と弟と暮らせるようになったのは嬉しかった。特にゲルを頂いた時、長らく友人のゲルを転々として苦労した母がゲルをもてることに幸せを感じた。高校卒業まではNGOから1人月2万Tg、3人で月6万Tgの支援を受けて生活した。卒業後は支援がなくなるので、NGOの学費支援で美容師の学校に6か月通えた。子どもができて仕事をやめるまで美容室で働いた。

バートルさんとは、施設でつきあいはじめたが、年上の彼は先に退所し、親と住んでいた。2004年にソロンゴさんが退所してからもしくは会っていたが、彼が転職して連絡が途絶えた。2007年、バートルさんの消息を知る友人が彼のゲルの場所を教えてくれたので、再会できた。その後はバートルさんがソロンゴさんたちのゲルに入る形で、自然に4人で暮らすようになった。彼は働いていたのでお金も入れてくれていた。そして、子どもができたので、出産前に入籍した。

出産後、母親がお世話になったNGOに現状報告し、今後の相談をするなかで「ゲルは必要？」と聞かれた。子どもができ、母や弟との別居を考えていた時期だったので、夫婦はゲルを支援してもらった。長女が5歳になるまではバートルさんの両親のハシャーに夫婦のゲルを建てて住んだ。その後、ソロンゴさんの弟が仕事で地方に行くことになり、母親が一人暮らしになるので、夫婦でもとのハシャーに戻った。

以降、現在までハシャーには、ソロンゴさん夫婦のゲルと母親のゲル、物置と犬小屋、トイレが建てられている。土地の登記はしていない。[2017年8月、9月インタビュー]

ソロンゴさん一家の場合、施設入所前は家がなかったため、親戚や知り合いの家、職場、幼稚園等の様々な場所を「転々とした」。施設退所後のチメグさん母子もいろいろな場所を転々と住んだが、逆に言えば、これらの点となる空間は、彼女たち母子が路上に投げ出されないためにみつけた都市の多様な隙間である。

しかし、施設入所後も母親との関係が途切れていないこと、退所時にキリスト教系の国際NGOとつながったことから、家族支援を得られた。それは、一定の経済的支援と弟を含む家族で住める家（ゲル）と場所（ハシャー）となり、現在に至るまで彼女たち家族の生活の拠点となった。夫もまた、施設時代からの友人であり、苦勞を分かち合い家族を支える信頼関係が築かれている。

2017年調査当時、夫婦と子ども2人（9歳娘、4歳息子）の4人家族だった（その後、二女が誕生）。バートルさんは地方の鉱山でエクスカベーターをしており、春4・5月から11月頃、地面の土が凍るまでは、20日泊まり込みで仕事をして10日間ウランバートルに戻る。⁴²⁾ 冬の間、鉱山の仕事はないので、別の仕事の誘いがあれば出るが、そうでなければ、家族一緒に暮らす。施設退所後の生活を支えてくれたのは、誰か／どのような存在かと聞くと、何より夫のバートルさんだという。

いつも2人で話しあい、協力してきた。バートルは2人で話したことを少しずつ実現している。働いてお金を稼ぎ、いつも子どもたちが怪我や病気をしないよう、食べるもの、着るものも気にかけて支えてくれる。彼は友人であり子どもたちの父であり、私の大きな支えです。母も常に私を支えてくれたし、モンゴルの子どもの支援してくれたNGOにも感謝しています。今の暮らしに不満はありません。車がほしいとか、将来はアパートに引っ越すか、大きな庭のある土地を買ってゲルか大きなバイシンを建てようとか、子どもが少し大きくなったら私も働きたいとか希望はありますが、それらは少しずつ実現していけるものなので。 [2019年6月インタビュー]

事例C. エルデネさん

両親が亡くなり施設に入ったエルデネさん姉妹はそれぞれが技術専門学校を卒業した21歳まで、施設で暮らした。先に、姉のエルデネさんが退所した。退所後しばらくは養護施設の「夏の家」の引率を手伝ったり、住み込みのベビーシッターをした。その後、同世代の友人たちの集まりで知り合った男性と結婚した。[2017年8月インタビュー]

当初は、土地を借りて、自分たちで買ったゲルを建てて暮らした。その後、賃貸のバイシンに住んだ。バイシンを借りるのはやや高い。その後、夫の両親の家や子どもたちの学校に近い市西部のゲル地区に空きハシャーを見つけ、引っ越した。空きハシャーのを見つけ方を聞くと、父母が、「いつ通るかかっても誰もいないから空いているかも」と教えてくれたので、ホローに連絡し、借りたいと相談したところ、家主にきいてくれた。1か月4万Tgで借りている。自分たちの土地はない。[2019年6月インタビュー]

2019年当時の家族構成は、夫婦と娘2人だった（その後、2023までの間に長男と三女が誕生）。夫は施設出身者ではない。2017年調査時には、子どもが小さい間は外で働けないが、ずっと仕事を続けている義母に「女性でも母親でも仕事は持つべき、施設育ちだと働かなくても誰かに助けてもらえるのか」などといわれ、働くことへのプレッシャーを口にしていた。2019年調査時には、コンビニで働いていた。夜勤の日もある。夫とうまくいかずに悩んだ時期には、戻る実家がないため、子連れでシェルターに身を寄せたこともあった。そんなとき、日本の支援者たちの通訳だったツェツェグさんに相談したり、励まされたりしてきた。

事例Aのチメグさん姉妹が「割り込み居住」したのに対し、エルデネさんは家賃を払ってバイシ

ンを借りたり、ハシヤーの土地を借りたりしている。ウランバートルにおける土地の価値の高まりや土地への権利意識が強くなったことの現れかもしれない。⁴³⁾とはいえ、ハシヤーの囲いがあったとしても誰かが実際にその場所で暮らしている生活実態があるかを通りがかりの義父母が関心を寄せながら見ているように、都市の様々な隙間に人々が寄せる関心も見える。貸主にとっても土地は空けておくより、管理を兼ねて誰かが住んでいる方が安心という感覚もあるようだ。こうして借りた彼女の家にはときどき妹が身を寄せていることもあった。

事例D. セオラさん

2014年に施設を出たセオラさんは、姉の家に住んだり、住み込みでベビーシッターをしたことがあるというが、基本的には、裁縫の専門学校を卒業後、縫製の仕事を軸に生活してきた。最初は学生時代にインターンで関わった会社にいたが、退所翌年の2015年には、半年間、内モンゴルの縫製工場に行った。出稼ぎである。

内モンゴルの方が給料がいいのかと聞くと、給料は、量や質、デザインなどつくったものによって違うが、食事と住む場所は会社から提供され、働いている時間がかなり長いため、給料はそのまま貯金できたという。セオラさんが入ったのは、民族衣装をつくる会社で、いまは卒業式や結婚式などで思い思いのスタイルの伝統衣装を着るのが内モンゴルの若者に人気だという（写真5）。民族衣装の縫製は、分業ではなく、1人で一着をつくりあげるスタイルだ。彼女は、朝8時から夜1時まで働き、仕事が多い場合は泊りで縫製した。ハードな仕事だが、良いものをたくさんつくると給料も多くもらえるためがんばって働いたという。そのため、2017年から約2年、再度内モンゴルで働いていたが、向こうで知り合い、付き合っていたモンゴル人男性と結婚することになり、ウランバートルに戻ることにした、と幸せそうに話していた。[2019年6月インタビュー]。

本節では、ウランバートル各地に広がるゲル地区で暮らす施設退所後の4事例7人の青年の足



写真5 当時、彼女のスマホには自分で手掛けた多くの民族衣装が残されていた。彼女の技術の高さを伺わせるバリエーションに富んだものであった。いま、モンゴルでも若い人たちの間に民族衣装への需要がある。2019年6月 [撮影:植村]

跡を辿った。退所後、親元に戻ったのは2人、他はキョウダイを頼ったり、住所確定センターやNGOの寮、住み込みの仕事を見つけるなどして、学校あるいは仕事を探し、少しずつ生活の道を切り拓いた。また、所在が分からなくなった恋人を探し、一緒に暮らし始めた人もいる。他にも、都市の様々な隙間をつくりだし、身を寄せたり（青年だけ／子どもができてからは親子で）、組み立て・解体の自由度の高い家（ゲル）を補完的に利用しながら柔軟に生活できる場所を確保してきた姿が浮かび上がる。その過程で、ウランバートルにおいて、遊牧文化の相互扶助的な土地利用を見せる「割り込み居住」や、親族や友人・家族などを家や土地に受け入れて共住する実践、あるいは土地・バイシンの賃貸といった複数の方法が用いられていることも明らかになった。

4. よりよく生きる

都市の隙間にスルッと入り、なんとかそれぞれが住む家を見つけ、食事や服などを整え、次世代の子どもの誕生をもって、「自場」の形成といえるのだろうか。本節では、2017年、2019年、2023年と、調査に行く度に少しずつ変化していく彼らの暮らしに注目したい。

事例A. チメグさん

チメグさんとは町中で何度も会って話を聞いたが、2019年にはじめて彼女の自宅を訪問した。市の西側にある人口の多いゲル地区で、ハシャーの敷地は広く、清潔で、バイシンが一軒、ガレージと奥にゲルが1つ建てられている。ガレージには、冬場に使う家財道具などを仕舞っているという。

バイシンで暮らしていたが、訪問の少し前に台所で火を出し修繕中だった。小火に気づいたときは、バイシンの扉を開けて大声で助けを呼んだ。近所や通りかかった人たちが手分けして消火活動を助けてくれたという。バイシンを修繕中なので、訪問時は初夏だったがゲルを組んで生活していた。ゲルにはストーブがあるので、もとより冬場はゲルの方が温かいので、現在でも冬はゲルを組んで暮らす。夏の間は、家のなかでストーブを使うと暑いので、ストーブを外に出し、外で料理し、外で食事をすることもあるという（写真6）。

そこには、必要な時に組み立てる、寒さに適している、しかし季節に合わせてゲルを軽くしたり、内部のパーツを外に動かして使うなど、ゲルの利便性と深く結びついた知恵と生活実践が見られる。加えて、こうした生活実践は、固定家屋であるバイシンは常に土地に建つが、ゲルは必



写真6 外から見ると密集地帯に見えるゲル地区も、中に入り暮らしの様子がわかると広々と感じる。また快適さや利便性が考えられ、様々な工夫が加えられた住空間である。2019年6月【撮影：植村】

要に応じて組まれたり片づけられる家だという特徴の違いを際立たせる。また、ハシャー内にあるバイシンとゲルの関係が、豊かさと貧しさや上下の関係にあるのではなく、並置や補完の関係にあることを強く認識させる。

私たちは、お金持ちではありませんが、いま、十分生活できています。私にとって、「子どもが元気に育っていること」が、十分であることなので、その点で十分暮らせています。施設を出たあとの私たちの暮らしを助けてくれた妹にも、日本の支援者にも感謝しています。自分たちの財産より、私は子どもの幸せを優先したい。子どもたちが元気でいてくれるなら、それでよいと思っています。 [2019年6月インタビュー]

チメグさんの子どもたちは夕暮れときまで外（ハシャーのなか）で遊びまわり、お母さんの帰りが遅い近所の友達も一緒にご飯を食べていた。インタビューでは、すぐに子どもができたので友人は施設でできた人たちだけと言っていたが、こうして食事のときに家族のなかに他人の子どもが混じったり、小火の際に一緒に消火活動をしてくれる近隣の人たちがいることも見える。⁴⁴ チメグさんが家で作る素朴な自家製パンは、とてもおいしく、多くの子どもたちが賑やかに生活しながら掃除の行き届いたゲル生活に触れると、彼女が優先するものとその丁寧な暮らしが見えるのである。

事例B. ソロンゴさん、バートルさん

インタビュー当初から、行き届いた掃除、おもてなしの料理を用意して迎えてくれること、子どもを大切に作る姿勢、そして季節によって違う仕事したり勤務地の変化はあるものの働いて生活すること（バートルさん）、子育てがひと段落したら仕事をしたい（ソロンゴさん）など生活の構えは変わらない。しかし、訪問を重ねる度に変化しているのは、セルフビルドによる住空間の拡張と生活道具や家財道具の変化である。

最初に訪問した2017年、ハシャー内には夫婦のゲルと母親のゲルの2つがあり、他には犬小屋と簡易トイレが設置されていた。2019年には、子どもがもう一人誕生して5人家族になった。そして、バートルさんが近所に住む友人たちの手伝いを得て新しく建てた綺麗なトイレが設置されていた。掘った地面をコンクリートで固め、定期的にバキュームカーを依頼して処理することにしたという。トイレ内には、「子ども用の方でしないで」とか「なかでタバコを吸わないで」という貼り紙があった。理由を聞くと、隣人宅のトイレが壊れたので、貸しているという。以前、自宅トイレが倒壊したときは隣人に借りたという。また、以前は土だった隣の庭の一部がコンクリートに変わり、ソロンゴさん夫妻の子ども達はその一角で自転車に乗っていた。子どもたちを庭で遊ばせてもらえるか聞いたら隣人は快諾してくれたという（写真7）。

住宅街であるゲル地区では、隣接する住民間でもこうした貸し借りが行われている。同時期、彼女たちは複数軒ある隣人のうち一軒との間に土地問題を抱えていていた。ソロンゴさんたちが長く住む土地は自分が登記した土地だから出て行ってほしいといわれたという。NGOが紹介してくれた場所なので、「割り込み居住」だったのかとも思ったが、当時はまだ私有化が広まっておらず、土地の登記も盛んではなかったためはっきりしないという。現在、この隣人は住んでおらず、ハシャーを人に貸して、時折様子を見に来るといふ。ソロンゴさん夫妻は、自分たちもこの場所を気に入っており、他に住む土地もないので簡単には出ていかない、そちらが出るならこの土地を買う、と伝えたら何も言わなくなったという。以降、この隣人とはなるべく土地の話題を避け、



写真7 コンクリートを敷いた隣人のハシャー内で遊ぶ。思い思いの改変を加えるゲル地区で、素早く道具（自転車）に適した環境（コンクリートの平面）を見つけるのがうまいことに感心する。2019年6月 [撮影：植村]



写真8 正面にテレビ。坂道の多いゲル地区でも移動しやすいベビーカーもきちんと屋内に収納されている。2019年6月 [撮影：植村]



写真9 大型化したテレビ。オンライン授業でも不便はなかったという小学生の息子は、父・バータルさんに来客中だから小さな音にしなさいと言われながら、大画面でテレビをみていた。2023年3月 [撮影：植村]

現状を維持しているという。

コロナ禍を経て訪問した2023年になると、子どもたちの身長が伸びただけでなく、夫婦のゲルはさらに大きく、美しいものに変っていた。テレビは以前よりずっと大きく（写真8, 9）、冷蔵庫も中型から大型の細長いものになっており、あまりに冷蔵庫が大きいためにその上部の梁を数本抜き、全体のバランスを取ってゲルを建てていた。コロナの間は小学校もオンライン授業だったため、自宅のwifiで、娘はタブレット、息子は母親のスマホを用いて授業を受けたという。

また、ゲル入口に、下駄箱や一部の家具を収納する小屋が連結された。まず小屋に入って靴を脱いでから家の中の空間であるゲルに入る形になっていた。これもバータルさんのセルフビルドである。ゲルに住む彼らの場合、冬と夏にゲルを建て直す。以前より、こうしたときは近くに住む施設時代の友人たちに手伝ってもらおうといていた。なかにはコロナ禍で仕事がなく生活が厳しくなった友人もいたそうだが、バータルさんは仕事があったので、給料日には困っている友人たちに食べ物などをもっていったようだ。これまで自分たちでなんとかしてきたから、市役所や他のところにはそこまで期待していない。事例Aのチメグさんも、施設のときの友人宅に身を寄せた時期があり、彼らのことを「親戚のよう」と話していたが、ソロンゴさん夫婦にとっても施設での友人関係は、退所後も家族や親戚のようなものと語られ、現在までの日常を支える大事なネットワークのひとつになっていることが見て取れる。

このように、彼らは自分たちの暮らしを「グレードアップ」させながら暮らしているが、「いずれは自分たちの土地を購入するか、アパートに移動したい」とも話しており、必ずしもこの場所に固定的な生活基盤を固め、構築するというような様子は見られない。様々な可能性を見ているようである。

事例C. エルデネさん

2023年、エルデネさんは4児の母となっていた。夫婦は、夫の両親と一緒に市北部の新興ゲル地区に土地を購入し、引っ越していた。急傾斜の丘にあり、近隣のほとんどが現在、土地を造成中で、地崩れしないようハシヤーの周辺にはタイヤが埋め込まれ、少しずつ住環境が形成されていた。そこに、犬小屋、物置をおき、義父母はハシヤー内に建てたゲルに住み、エルデネさん一家は自分たちで建てた美しいバイシンで暮らしていた（写真10, 11）。

家は、夫、義父、義弟らが協力して建てており、外にデッキテラスをつくっている途中だった。セルフビルドでここまでしっかりしたバイシンが建つことに驚いていると、義父は大工だという。夫は、変わらず車修理の仕事をしており、市の中心街を抜けて反対側に出勤するため、朝早くから夜遅くまで仕事に出ている。子どもの学校の送迎は義父母が協力してくれているという。施設育ちであることや、様々な衝突が家族の中にあっただとはいえ、4人の子を持つ優秀母⁴⁵⁾となり、ハシヤーを共有しはじめたことで義父母との距離もよい形になっており、子育てを手伝ってもらえるようになったためか、4人目の出産間もないが仕事をはじめようとしていた。

事例D. セオラさん

2019年、結婚を控えて姉の家にはいたセオラさんは、その後結婚して息子を出産した。しばらく夫の両親宅のそばで暮らしたが、夫があまり働かず、セオラさんの稼ぎだけで暮らす期間が続いた。お酒を飲むこともあったので、息子連れて家を出た。「あの暮らしを続けるより、息子のことやこれからの教育にお金を使うために働く方がいいから」という。

幼い息子と2人になった彼女は、求人広告でアトリエでの仕事を見つけ、働きながら息子を育て



写真 10 ゲル地区なのでキッチンの流しに水道はない。ブルーのタンクにはきれいな水が入っている。2023年3月
[撮影：植村]



写真 11 広いリビングにはソファベッドの向かいに、やはり大きなテレビが置かれている。奥は子ども部屋で、娘2人のベッドと勉強机、学用品が整頓されて綺麗に使われている。2023年3月
[撮影：植村]

ていた。調査に発つ前は、彼女は息子を24時間幼稚園に預け、平日は働いていると聞いていたが、市の中心地にある職場を訪ねると、職場の紹介で近くの幼稚園が見つかったため、朝預け、夕方迎えに行き息子と一緒に市内のアパートの地下の部屋（と聞くと薄暗く狭い部屋が想像されるかもしれないが、明るく空間も広い）に住んでいるという。

職場の社長は、伝統衣装デールを現代的なスタイルにデザインしなおし、モンゴルの若い世代を惹きつける、特別な時だけでなく日常で着るアイテムに伝統的な要素を取り入れたデザイン・アイデアを持った若き女性事業家で、以前はテキスタイルの販売事業をしていた。その後、デザインを学んで立ち上げたのが現在のアトリエだという。販売もしているが、オーダーメイドの注文がモンゴルの若い世代、内モンゴル、ロシアなどから入る。セオラさんの他に、7人の女性が働いている。新規事業として立ち上げた矢先にコロナ禍となり、国の助成金などの対象にならず経営は苦しかったが、生地を売るなどして従業員の給料を捻出し、1人も解雇せず凌いだという。

セオラさんは職場の人たちにも、施設で育ったことやシングルマザーであることを話しており、子どもの発熱時や幼稚園行事などに参加できるよう快く協力してくれたり、アドバイスがもらえて、とても良い環境で働くことができているという。

4人の経年的変化を追うと、彼らが「よりよく生きる」実践や選択をしていることが分かる。何を「よりよい」事柄とするかは、各人の考えや経験に基づく判断を含むため多様だが、常に暮らしやその環境に自分たちで手を加え、工夫を重ね、少し先の未来にも備えている点で共通してい

る。18歳～21歳という時期に施設を退所したあとの彼らの「自場」形成には、単に住む場所を確保する、食事ができる、仕事を見つける、家族をつくる、といった状態ではなく、各自が自己実現に向けて、あるいは「よりよく生きる」営みと選択の上に自分の生きる場＝自場の形成を続けている姿が見えてくる。

5. 協働的に紡ぎ出される「自場」

本章では、モンゴル社会の転換期に施設での生活を経験した青年たちのその後の生を追った。人々のライフヒストリーを通じて、都市のさまざまな場所を「転々とする」経験のなかに、彼らを取り巻く関係性と都市のなかにある様々な生きられる空間が浮かび上がった。

都市の隙間にスルッと「入る」実践には、むき出しの都市の路上に投げ出されないための知恵が見える。同時にその場所から「出る」局面には、キョウダイの家に身を寄せるなどして、「住み着く」より、恋人らの消息をもとに都市を探し回る、子どもに必要なケアができない状況なら義父や夫との暮らしから飛び出す、シェルターに移動して物理的距離を取るなど、時に関係性は切られ、自身の生活の場を別の環境へと引き離す実践も見られた。衝突必至の土地の話題を避けて現在の場を保持する、別居しても働いたお金をもって子どもに会いに行く、離婚しても職場の理解を得ながら子育てができる関係をつくっていくなどを含めると、自場の形成過程には、彼らがその時々で「よりよく生きる」ために優先しているものと、個人が単独で行うだけでなく互いの生活の場を協働的に支えあう他者との関係性が見えた。次世代の子どもたちを考慮した行動が多かったのは、聞き取りが青年期から仕事や家庭を持ち、あるいは自身が親になる時期に重なっている人が多かったことも影響しているだろうが、相互扶助を残しつつも、変化する都市を生き抜こうとする人々の技法のなかに、支援されるだけではない自立と協働による自場形成の特性があるのではないだろうか。I章で文化的葛藤として村井が述べた、寝泊まりできる空間（「隙間」）に困っている人が留まることを受け入れるドルマさんのエピソードは、まさにこうしたモンゴルの実践と技法を継承したものであり、それが日本の施設では「問題」視されることとあわせて興味深いところだ。今後、養護施設退所後の彼らの人生に対するリービングケアやアフターケアがあるとすれば、住まい、同居者、職場、季節に応じた対応などのしなやかな柔軟性を許容し、他者を受け入れ、場の（一時的な）共有を許す距離感や関係性を許容するものでなくてはならない。

人々が入った都市の「隙間」には、社会主義時代に近代都市としてインフラ整備されたアパート群や学校や寮の地下などにある空間である場合と、一定区画の土地とセットになったゲル地区とがあった。さらに、人（単独で、あるいは母子）がどこかに身を寄せるケースだけでなく可動性のあるゲル（家）ごと場所を見つけて移動する点があるのは、遊牧文化を部分的にも継承する現代モンゴルだからこそ、都市で生きる選択肢の多さにつながっていた。それは、II章で田村も指摘しているような、かつて日本の住宅政策のなかで生活の「上昇」を前提しながら段階的に高層アパートへの建て替えを行い、時を重ねることで老朽化していった「ハコモノ」としての住空間（あるいは「家族の住空間」）とは異なり、常に新陳代謝を繰り返し、ライフスタイルや家族・状況の変化に応じて柔軟に暮らしの場とともに形づくられる都市の姿でもある。

ゲル地区をはじめとする彼らの現在の居住地での生活実践において、共同水道場の利用やゲルの定期的な手入れ、セルフビルドによる空間拡張などの恒常的な働きかけは、一見手間がかかる「不便な」住環境に見えるが、その手間や柔軟性があるからこそ、彼らの生きる場が恒常的に周囲の人々との協働性ととも紡ぎ出されていることも見えてきた。こうした恒常的な営み自体が繰り返される都市に、多くの人々が生活の場を切り拓く協働的な隙間が確保されるのだとするなら

ば、モンゴルの人々の都市実践に学ぶところも大きいだろう。

筆者らが調査で往来を重ねるにつれて、ウランバートルの都市化は見た目にも進展しており、延々と続く交通渋滞、きらびやかなショッピングモールや暗証コードつきの門に囲まれたゲート型タワーマンションも建ち並び始めている。しなやかな自場形成の背後に見られたモンゴル都市に残る遊牧的要素や人を隙間に受け入れ場の共有を許容する人々の生活技法は、今後どのような生活の場に継承されるのだろうか。

おわりに：アンケートと現地調査からみる児童養護施設出身者の分析

以上、主としてゲル地区に暮らす20～30代の施設出身の暮らしに見える「自場」形成の過程を追ってきたが、2017年からの4回にわたる現地でのインタビューと2022年に実施したアンケート調査を併せて考察すると、現時点では以下の特徴が浮かび上がる。

①教育観

社会主義時代から続くと思われる教育程度の高さ。特に女性に高学歴の傾向がみられる。⁴⁶⁾ また、養護施設の子どもでも高等教育や外国語教育を享受すべきとする認識がある。高校までで公的支援が打ち切れ、その後の教育支援が行き届かない日本の施設出身者と比較すると、彼らとの教育観の違いが窺われる。⁴⁷⁾ 特に外国語教育への要望が高いのは、留学や出稼ぎなどで国外に出る可能性を視野に入れているモンゴルに特徴的である。

②仕事観

人々の仕事観に関係するが、学校・大学で取得した専門性や資格があってもよりよい条件なら特定の仕事に留まらない。鉱山関係以外の主産業の停滞もあり、学歴や保有資格に比して恒常的な職が少ない状況にあるが、場合によっては海外に働きに行ったり、子連れでの短期・中期の移住など、移動性の高さ、移動への肯定的見解がみられる。

③家庭観

生業や社会主義時代の影響もあり、男女ともに仕事をもつこと、家庭と仕事の両立が当然視されている。一方で、家庭内では、母と父に一定の役割分担が見られ、子育てに関して母子の関係、ないし母が担う役割は大きい。また施設出身者らは、家事や生活技術全般を施設で身につけたが、それらは家庭生活や子育てでも活かされていると考えていることがアンケート調査からわかった。

④近隣関係

自宅周辺の近隣関係の希薄さに比して親類・知り合いの協働関係の濃さ。住み込みや土地管理などの形態で、親戚や家族以外の人々との同居ないし誰かの土地に住むこともある。また、都市のゲル地区でも季節ごとのゲルの建て直しやハシャー（板で囲った敷地）内の建設作業等では常に協働体制が採られ、その関係はコロナ禍での食べ物や必要物の相互扶助とも重なっていた。これらの協働関係には、遊牧民の伝統的互助関係（ホト・アイル）にも通じるものが伺われる。

⑤インフラ

電気、水配給所や洗濯場等の設備、保育・学校制度や医療制度等の基本的なインフラが、今日のゲル地区では比較的整っており、人々は住まいや生活をより充実させようと常に手を加えている。この志向は同時期にインタビューを行った遊牧民にも共通し、質素なゲル生活でも、内部の整理整頓が行き届き、太陽光発電やパソコン・携帯電話の利用は非常に活発であるし、遊牧にも積極的にオートバイのみならず車等も活用している。

以上は、決して施設出身者だけの特徴ではなく、一般の若い世代に共通する現代モンゴルの人々の行動パターンの一部として敷衍できると思われる。従来、否定的に語られがちであったゲル地区における暮らしのあり方とその変化を、今後も実証を重ねながら、「しなやかな自場形成」の場として追っていきたい。

謝 辞

本研究は、東京国際大学の研究助成「家族共同体の変容が及ぼすモンゴル養護施設児童の自立に関する研究」（2016年度）及び、JSPS 科研費「モンゴル都市貧困母子の『自場』の形成過程—『当事者支援』から『生活者の協働』へ」（18K02162 / 2018—2022年度）の助成を受けたものである。私たちの研究協力者であるニーマ・ムンファジャルガルさん、ナラントヤ・ズモーリンさん、調査に協力してくださった皆様に心から感謝します。

注

- 1) 唯一と言えるかもしれない先行研究として山下らの研究がある（山下英三郎・林令子「モンゴルにおける児童自立支援に関する考察：養護施設退所者の追跡調査から見えてきたこと」『社会事業大学紀要』2007：pp. 117-128）。彼らは退所後の青年たちの生活把握がなされていないことを問題視して6人の退所者を追跡インタビューし、自立を支援するソーシャルワーカー養成を提言したが、若者自身の生活の形成過程については述べていない。
- 2) 路上で生活するストリートチルドレンのこと。寒さを避けるために、ウランバートルの地下に張り巡らされた暖房用のスチームパイプ点検用のマンホールを住居としている子どももおり、このように呼ばれた。1998年ピーク時で約4,000人の子どもが路上生活していた。
- 3) 島村一平、『憑依と抵抗』、晶文社、2022：p. 130。
- 4) 外務省、「モンゴル基礎データ」、2023年8月15日。
- 5) 松宮邑子、『都市部に暮らすモンゴル人：ウランバートル・ゲル地区に見る住まい空間』、明石書店、2021：p. 13。
- 6) その他、イフ・ホトなどの名称もある。イフは大きい、フレーは遊牧集団の駐営方式である環＝クリエンに由来する。その後、チベット仏教が普及すると移動寺院の意味でも使われるようになった。中国語では、フレーは「庫倫」、ロシア語では、モンゴル語で宮殿を意味するウルゲーに由来し、「ウルガ」と呼ばれた。（佐藤憲行、『清代ハルハ・モンゴルの都市に関する研究：18世紀末から19世紀半ばのフレーを例に』p. 36の注1）。
- 7) フレーは、その後土地が汚れたなどの理由で2度移動し、最終的定住は1855年。
- 8) 佐藤、前掲書、p. 12。
- 9) N. ツルテム監修、『モンゴルの曼荼羅（モンゴルの美術1）』、新人物往来者、1987：図155。撮影：杉山晃造、原図は作者不明、ガンダン寺所蔵）より転写。
- 10) 包慕萍は、内モンゴルのフフホト建築史を例として、このような都市のあり方を「遊牧都市」と提示している。著書の「あとがき」でウランバートルに調査に訪れ、ビル群とゲル群から構成された景観を見た時に、今も遊牧都市が引き継がれている証に見えたと述べている。（『モンゴルにおける都市建築史の研究：遊牧と定住の重層都市フフホト』東方書店、2005：p. 294。）このような包の見解に対して、小長谷は建築群からだけではなく周囲との関係の築き方によって都市のあり方を考えるべきと指摘している。（小長谷有紀、〈書評〉（包慕萍著同上書）東洋史研究 2006, 64(4)：pp. 769-778。）また、深見は包の論文の背景にモンゴル伝統文化への理想的幻想と遊牧生活への憧憬があると評している。（深見奈緒子、〈書評〉（包慕萍著同上書）建築史学、2005, 45巻、pp. 215-225）しかし、遊牧と都市を拮抗させてきた既存研究に新しい視点を与えた包の問題提起の意義は今も大きい。
- 11) 宮脇淳子、『モンゴルの歴史：遊牧民の誕生からモンゴル国まで』、刀水書房、2002：p. 238。
- 12) 松宮、前掲書、p. 53。

- 13) 石井祥子, 「遊牧の国の首都ウランバートル」『草原と都市: 変わりゆくモンゴル』, 風媒社, 2015: p. 100.
- 14) 現在のゲル地区は丘陵地に広がっているが, 当時は平野部に限られていた. 石井, 前掲書, p. 101.
- 15) 松宮, 前掲書, p. 55.
- 16) 松宮, 同上書, p. 57.
- 17) 私たちのインタビュー対象の一家族も二重登記に巻き込まれ, 居住ゲルからの退去を迫られている状況にあり, 困惑していた. ウランバートルの都市問題については, 村井美紀, 田村愛理, 植村清加「モンゴル社会変革期における女性の「自場」形成: フェルト産業を中心にして」『東京国際大学論叢 人文・社会学研究』第4号, 2019: pp. 37 ~ 38でも既に述べた.
- 18) 2019年6月調査時の水の値段は, 1ℓ = 1 Tgであったが, 2023年3月では, 1ℓ = 2 Tgになっていた. 水は地下の貯水槽に給水車で毎日運ばれる. (2023年3月の交換レート 1 ¥ = 26.5 Tg).
- 19) 島村一平, 前掲書, 第1部3を参照.
- 20) この土地は江戸時代までは, 尾張徳川藩の下屋敷であったが, 明治以降に陸軍の各種学校用地となった. そのため, 筆者の幼少期には新宿の真ん中において緑深く, 雉や梟などがまだ生息していた.
- 21) 古賀蘭子, 定行まり子, 「1940年代から1970年代における住宅及び団地内施設の実態: 戸山ハイツの歴史的経緯に関する研究 その1」, 『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』第20号, 2014: p. 63.
- 22) 古賀蘭子, 定行まり子, 同上論文, p. 63.
- 23) 結局, 組合は潰れて最終的には, 精肉店や青果店などの個人商店街が公衆浴場のすぐ側にできた.
- 24) 因みに, 住宅難を解消するべく1955年に設立された日本住宅公団が戦後初めて供給した鉄筋コンクリート公団住宅は, 大阪の金岡団地900戸である. この団地は全て2DKでステンレス製ダイニングキッチンが若い層に憧れの的であったが, 現在は老朽化により建て替えが行われている. 「1956 ~ 第1号団地の誇りと記憶を引き継ぐ広場に集う, 金岡団地」『古くて新しい団地の未来 (1956 ~)』, UR 2015 Vol. 43 UR都市機構の情報誌, ur-net.go.jp より, 2023年9月16日参照.
- 25) 宮城まり子主演の資源回収業者 (当時の呼称はバタヤ・ばた屋) の集落を舞台にした映画は, 1956年の「ボロ靴交響曲」(白黒)と1958年の「オンボロ人生」(カラー)の2本がある. カラーと記憶しているのが後者であろう. 東京のバタヤ地区は, 1950年代の文芸等に頻繁に登場したが, 60年代の高度成長期に消滅していった. これについては, 本岡拓哉, 「戦後東京, 「バタヤ」をめぐる社会と空間」『ジオグラフィカ千里』第1号 (2019), pp. 93-117. を参照されたい.
- 26) 松宮, 前掲書, p. 204.
- 27) ホトは「家畜の寝るところ」, アイルは「家, 家族, 隣人, 近隣」の意.
- 28) 松宮, 前掲書, p. 236.
- 29) 石井祥子, 前掲論文, p. 111.
- 30) 例えば, UNICEF, “Street and Unsupervised Children of Mongolia” 2003, モンゴルにおけるストリートチルドレンの現状」長沢孝司ほか編『モンゴルのストリートチルドレン』朱鷺書房2007, 照屋朋子「モンゴルの『マンホールチルドレン』の保護活動に関する考察」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』27号-2, 2020など.
- 31) デルゲルマー, A「児童養護施設に収容された子どもたちの状態」長沢孝司ほか編, 前掲書, p. 79, 照屋, 同上論文, p. 180.
- 32) UNICEFは保護後も施設ではなくマンホールを選ぶ子どもや, 退所後マンホールに戻るマンホールアダルトの存在を課題に挙げている (UNICEF 2003, デルゲルマー, 前掲書, p. 95). また, 山下らは子どもたちがひとつの劣悪な状況 (路上や家庭) からもう一つの劣悪な状態に移されるだけの「保護」や, 施設生活を余儀なくされた後, 一定の年齢になると十分なサポート体制もないまま退所させられることを問題視し, 子どもと家庭を支援するソーシャルワーカーの養成が急務と指摘した (山下・林, 前掲論文, 2007: pp. 117-128).
- 33) 山下・林, 同上論文.
- 34) 祖父はもと僧侶で地方出身者である. 母のキョウダイは5人, 全員ウランバートル生まれだが, 現在, 交流はない.

- 35) 子どもの足では遠いが、ウランバートル市内・西側にある鉄道駅周辺では列車からこぼれた石炭が手に入ったため、兄や妹と一緒に拾いに行っていたという。
- 36) 合併経験者らによると、2つの施設は全く運営タイプが異なる。チメグさん姉妹が最初に入った施設は、学校のあと外で遊んだり、自由に過ごせて楽しい思い出があるという。合併先施設は男の子や年齢が上の子どもが多かったからか、時間ごとに活動内容が決まっている管理主義的な体制だったという。
- 37) 筆者がここで「隙間」と呼ぶのは、物理的空間および社会関係的につくられる空間を指す。例えば、転換期に出現したマンホールチルドレンが暮らした「マンホールのなか」は、国が用意した家ではない。それは、路上に投げ出された子どもたちが、厳冬期に零下30度以下となるウランバートルという都市の物理的な空間のなかで暖を求めて見つけ出した「都市の隙間」であり生活空間だった。同様に、地下室や屋上、空き地、寮や学校の一角等も人々に柔軟に活用される隙間空間である。また、誰かが他者を自分のスペースに受け入れることでつくられる、関係性によって生み出される生存空間も、ここでは隙間と表現している。
- 38) Address and Identification Center. 国連が1989年「児童権利条約」を採択すると、モンゴル政府は1990年に批准し「ストリートチルドレン一時保護法」を成立させた。1996年にはウランバートル市警察の関連機関として住所確定所を設立。市民の通告を受け警察がストリートチルドレンを保護し、家庭環境や住所等の調査や親と連絡を行い、子どもを親元に戻すか施設に入所させるか等を判断する。デルゲルマー、前掲書、p. 83.
- 39) LET : Labar and Education and Training Center. 行き場のない7歳から17歳の子どもに住居を提供し、教育と就職を支援する訓練センター。1999年設立。子どもたちはほとんどが住所確定所からくる（照屋、前掲論文、p. 179）。2003年には18歳以上の年齢に達したために施設を退所した若者のための職業訓練センターが設立され、職業訓練による自立支援がはじめられた（山下・林、前掲論文、p. 119）。World Visionなどの国際NGOが小規模グループホームの創設等を行い、18歳以上の子どもの支援活動を行った。
- 40) 「定職がない」という表現ではあるものの、このような働き方、特に季節によって仕事が変わらざるを得ないケースは、調査で聞く限り、少なくはない。
- 41) モンゴル語では、「家族や宿営する ail buukh」「ゲルの裾を合わせて生活する khayaa niilulen amidrakh」という住文化に固有の共同生活を指す語彙で表現されるものを滝口らがこのように名付けたものである。滝口良、坂本剛、井潤裕「モンゴル・ウランバートルのゲル地区における住まいの変容と継承」住総研研究論文集、No. 43、2016 : p. 117.
- 42) 労働法が改正され、遠隔地の鉱山現場で交代勤務をする鉱山労働者に対し、2022年から14日勤務/14日休暇体制が保証されることになったが、その後の2023年調査時点でもバートルさんの職場にはまだ導入されていないようである。
- 43) ただし、社会主義体制下のゲル地区のハシャーは、国有という単一の所有制度に基づいたものではなく、国有の土地の利用権の譲渡や、住民の私的所有が認められる「生の財産」とされた家屋や柵は売買可能だった（滝口良「つぎはぎの所有——社会主義体制下のモンゴルの都心部における『生の財産』と居住空間の構成」、『北海道民族学』、第9号、2013: pp. 7-8）。ウランバートルの土地の権利意識や購入・売買が進んでいるのは確かなものの、ハシャーという居住空間を人々がどのように活用しているのかについては一つの現象として説明するべきではないのかもしれない。
- 44) 社会主義時代、ウランバートルでは住民組織によるハシャーと近隣の土地の整備や街路の整備、衛生や火災予防を行う啓蒙活動が組織されてきた（溝口、前掲論文2013 : p. 6）。住宅が集まる地区でもあり、現在でも衛生や火災予防に関して住民間の行動を方向づけるものが存在する可能性は高い。今回の調査で明らかにすることが困難だったゲル地区の住民関係やセルフビルド実践と周辺地域の相互反応等については今後の課題としたい。
- 45) モンゴルでは、4人子どもを出産した女性に「優秀母」勲章第2号が、6人子どもを出産した女性に「優秀母」勲章第1号が授与される。
- 46) これには、男性には学歴や資格がなくても生活できる様々な仕事があるが、女性が経済上の安定と機会を得るには学歴や資格が大事だとして、娘に高等教育を与えてきたモンゴルの生活習慣や考え方にも要因があると思われる。

- 47) 日本では2022年6月の児童福祉法改正案で、養護施設の支援上限年齢（原則18歳）が取り払われた（施行は2024年4月）。しかし、現状では彼らが大学以上の高等教育を受けるには、学費・生活費・居住場所・メンタルケア等さまざまな困難に直面しているのが実情である。